理事長登壇　(5)

天草ハンドボール協会
谷脇　寛



ハンドボールの普及を天草でやろうと考えて、早や十二年もたった。天草島も今では橋がつらなり島々をつなぎ、陸つづきになり島とは云えなくなった。

天草に於てのハンドボールの生みの親は、日体大を卒業してすぐに天草高校に新任で赴任し、苦労してチームづくりをされた森豊夫氏（日体大OB、現熊本県立鹿本商工高校勤務）である。その成果がみごとに実り、これ程、短期間で普及した競技種目も、チーム競技種目ではきわめて少ないのではなかろうかと考えている。

バスに乗り、舟に乗りかえ、三角半島から汽車で熊本市内まで遠征したあの項のことを考えると全く夢のようだ。今ではバスで二時間半天草にも県立高校が九校、分校二校、夫々の学校でチームをつくり活躍している。しかしながら地域的な問題、時間的距離的な問題をかかえどうしても大会に参加出来ないチームが多いので、本渡市協会を発足（昭和四十年四月）市の行事のたびに他種目と平行して、ハンドボール大会を年間三回程度開催してきた。この大会も回も重ねるごとにチーム数が増加してきたので、協会で検討し、中学校から一般までの大会にしようと考え昭和四十五年に第一回天草郡市ハンドボール選手権大会と銘を打ち、大会を開催した。参加チーム一般男子四、高校男子三、中学男子三、一般女子一、高校女子三、中学女子二、計十四チームが参加し、初回にしては多数で盛会だった。昨年は第三回大会を開催したところ老若男女多数のメンバーで構成されたチームの参加を得、午前九時から午後五時まで楽しい一日をすごした。

参加したチームの内容は、高校八、中学校四、一般七、教員二、計二十一チームであり、第一回、第二回大会と異なる点は、一般チームが増加したことである。このように年毎に参加チームが増えているのはきわめて嬉しいことである。中でも、タケベジャイアンツは、中央大学時代に活躍した武部栄一君のチームで若手選手で構成されている。

ボンボン9は、商店街の店主、店員でまとめたチームであり、青北クラブは、農業を営む青年団である。あらゆる人達が高校、中学生の若いエネルギーにまじり、優秀選手も居れば、珍プレーのおじさん、ママさん選手も居て一日を楽しく過した。

このように天草においては、地域ぐるみのハンドボールが各種の年令層階層の間に定着しつつあり今後がきわめて楽しみである。

このような大会を催すことにより、少しづつでも、生活の中にスポーツを生かしながら次代を担う青少年を心身共に健全に育成し、真にスポーツを愛する正しい方向づけをしなければならないと思う。

このような普及の方向というのは、現在の日本の体育界のめざしている社会体育の普及という点ともマッチし、ささやかながらその一角をになうことができるようになれば望外のことといえよう。

社会体育が発展する現在、本渡市協会を中心に企画したこの大会は、どうにか成功の道を進んでいると思う。これも日本ハンドボール協会、熊本県ハンドボール協会の心からなるご援助のおかげと感謝しています。

今後もこの現在の方向を続け着実に地域に根をおろした活動を伸ばしていき、生活の中にスポーツということをスローガンにしハンドボールを普及発展させていきたいと思う。

今後ともより一層の援助指導をくださるとともにこのような地域の着実なつみあげを大事に暖い眼をもってみまもっていただきたいと存じます。

生活の中にスポーツを目標に協会一丸となり努力する覚悟でいます。殊に待望のオリンピック種目としてハンドボールが登場するようになった。若い時代によき訓練を受けた人々が、オリンピックで活躍する日を夢み、さらにハンドボールの発展を期待します。

（筆者は熊本・天草協会理事）

× × ×

「ハンドボール」

4月号（第107号）目次

【表紙写真】　全日本ジュニア合宿に参加した高校選手――左から蒲生晴明（中大付属）、関健三（笠間）、梅林広（清水市商）、小松伊佐夫（湯沢）。円内は佐藤（上＝中大付属）と大島（下関中央工）。所属はいずれも3月1日現在。

【撮影・山口芳則】

韓国が棄権、アジア予選流れる

世界女子　日本の本大会出場は確定的

第5回世界女子選手権アジア予選日本―韓国戦（4月、日本で2試合）は韓国が突然「棄権」を申し出たため日本の不戦勝となった―韓国の不参加は、韓国協会から3月16日夜、国際ハンドボール連盟（IHFアジア代表理事渡辺和美氏＝日本協会副会長＝）あてに伝えられたことで明きらかになったものである。不参加の理由は「韓国協会内の事情」というだけで詳かにしない。

日本協会はただちにIHFに対し「韓国の棄権による日本のアジア地域代表権獲得」を申請するとともに、東京、大阪での開催準備を中止、3月10日に編成した同予選実行委員会（荒川清美委員長以下6名）は実質的には活動せぬまま解散した。なお、日本協会にも3月20日、韓国協会から「不参加」の公式文書が届けられた。

本誌締切（3月25日）までにIHFのこの件に対する表明はないが日本の本大会出場（4度目）は確定的である。

韓国が予選1ケ月前に突然「棄権」を伝えて来たことには、日本協会内部でも「予想したとおり」とする声と「意外」とうけとるムキの二筋の〝解釈〟がある。

韓国が今回の予選に出場しないのではないか、という推測は、昨年末あたりから一部でとりざたされていた。それは、同国の女子界がもう一つ力の結集に欠け、ライバル・日本と戦うためには不十分であるとみられていたからで、日本チームと伍角にわたりあっていた実業団・白花醸造（ソウル）が昨秋チームを解散したという風聞が事実ならそれも一因とされ、また、韓国協会の役員交替期にあたり、世界選手権（アジア予選）参加に、役員内の歩調が乱れたとみる人もいた。

一方、男女を通じて初めて世界選手権への意思表示をした以上、来日しないわけはない、とするみかたも強かった。

韓国球界は、日本にライバル意識を燃やしており、オリンピック予選（46年11月。20―9、21―7で日本2勝）で差のはっきりした男子よりも、女子の方に「打倒日本」の可能性があるとしても不思議はなかった。

1月31日に締切った男子の世界選手権申しこみ（＝本誌前号既報）に韓国が届け出ていないことから、いっそう「女子来日」のみかたは強まっていたのだが……

割り切れぬ「棄権」の報せ

それにしても、「韓国初参加」が伝えられた昨秋10月末から4ケ月たった時点での突然の「棄権」は、準備を進めていた日本協会にとって割り切れぬ印象を残した。

もともと、今回の予選でIHFが示した試合方式はホーム・アンドアウェイ（互いの国で1試合づつ）。しかし日本協会は、韓国側に国際規格（40m×20m）の室内施設がないとみて「2試合とも日本での開催」を昨冬に打診、韓国側は1月17日「しばらく検討させて欲しい」という連絡を寄越したままプツリと音信の糸が切れた。

「韓国内に国際規格の施設があり、ホームアンドアウェイを望んでいるのではないか」という観測が日本協会内に流れたのは1月末、それならそれで2月25日までに返答をということになったが、その日を過ぎても進展がなく、渡辺IHF理事と協議の結果、3月12日（第1戦の1ケ月前）を個人エントリーの締切とした。

この間、IHFから第1戦を日本側、第2戦を韓国側の国際審判員で行うよう指示があり、第1戦（4月12日）の会場を東京体育館、第2戦（同15日）を大阪市中央体育館に決めたことは本誌既報のとおりである。

いちどは回答期限延長

3月12日になっても韓国から連絡は一切なく、同日午後、日本協会・荒川清美理事長はソウルの韓国協会に国際電話、洪淳泰同協会副会長と話し合い「3月15日までに確答する」ということにまとまった。ところが15日にはなんの音沙汰もなく、日本協会から事態の中間報告をうけた渡辺IHF理事が、韓国協会にIHFの立ち場として国際電話したところ、16日夜になって朴応喆氏（韓国協会、元専務理事、現理事）から「韓国は世界女子選手権アジア予選への参加を断念する」旨が伝えられたのだ。

再三再四の回答期限に反応がなく、最後は不参加を告げてきた韓国協会に対し、日本協会内部には批判の声があがっており、特に今後、日韓戦を主管する地方協会が少なくなるという危惧は強い。

日韓ハンドボール交流は、日本体協事業の高校（男）部門を別としても学生男女、社会人男女と両国のほとんどの部門に架け橋されており両国のきずなは強いハズだ。

荒川理事長も「今回の韓国協会の態度は解せない。しかし、不参加の理由が韓国協会の内部事情というなら一日も早く再出発して、改めて日韓女子ナショナルの単独国際試合を行ってもいい」といっているほどだ。

初めての両国女子ナショナルの顔合せに、関係者やファンの関心も高まり、主管の東京、大阪両協会も準備が軌道へのりかかったところでの挫折だけに拍子ぬけの態である。

日本は4回目の出場

日本女子が世界選手権へ出場するのは一九六二（昭37、第2回）、一九六五（昭40、第回3）、一九七一（昭46、第4回）につづいて4回目。

すでに本大会の予選リーグ組み分けは発表されており、日本はルーマニア（前回3位）、フランス対ノルウエーの勝者とともにB組への出場が決まっている。

大会は今年12月7日からユーゴで開催されることになっており、その成績が期待される。ルーマニアにどのように対処するかがまず本大会の予備リーグでの問題となろう。

注目される今後の強化対策



アジア予選に備えて候補選手は，1月，3月2回の強化合宿を行い斗志を燃やしていたが，肩すかしされた感じである（写真は月の第1次合宿から。GK小原は負傷欠場）

韓国女子の棄権により、日本の本大会出場はまず確定的で、日本協会では、女子の頂点強化の目標を早急に「世界選手権」へ切り替えることになった。

すでに、アジア予選を勝ち抜き本大会へ進出した場合も、監督は井薫氏（大洋デパート監督）ー本誌105号既報ーに決定しており、具体的な対策は同監督と、新発足の日本協会強化委員会の話し合いになるだろう。

井監督のほか、アジア予選コーチングスタッフとして池田鉄哉（日本ビクター監督）、鈴木義男（田村紡監督）、藤原侑（日体大女子監督）の3氏が決まっていたが、このスタッフは一応白紙に戻される。

選手は47年度ナショナルチーム31名ー本誌103号参照ーのなかから20名がアジア予選候補選手ー同104号参照ーとなっており、1月東京、3月四日市で通算17日間の強化合宿を消化、3月10日には井監督から日本協会常務理事会へ「アジア予選出場選手名簿」が届けられていた。

日本協会では韓国のメンバーと同時発表の予定をたてていたが、その必要がなくなりこのリストは永久に公表されないことになる。

アジア予選候補（20名）をそのまま「48年度ナショナル兼世界選手権候補選手」とするか、新たな視点にたって候補選手が選ばれるか今後のなりゆきが注目される。

全日本女子、重機と強化試合

～4月14日・大阪で～

毎日放送がテレビ中継

日本協会は4月12日午後2時から大阪市中央体育館で「全日本女子強化試合・女子ナショナル対東京重機工業」の試合を行うと発表した。

中止された世界女子選手権アジア予選の代りに「毎日放送・ワイドスポーツ」のテレビマッチとして行われるものである。

女子ナショナルは昭和47年度ナショナル（31名＝本誌103号参照）のなかからアジア予選候補（本誌105号参照）を中心に選抜され、牧野、古佐原、市川ら東京重機勢は自チームから出場する。全日本女子の強化試合はめずらしい。なお、毎日放送（ＭＢＳ）系列によるテレビ中継は同日午後2時からの予定。

特別ルールを採用か

日本協会はこの試合を、強化、テレビマッチといった特別の意図をもって組まれたことから特別ルールの適用を考えている。

主な点は、前後半各1回、コーチが「作戦タイム（90秒間）」をオフイシャルタイマーに要求し、競技を中断、選手をベンチ前へ集めることができるというもので、総務企画部と大阪協会（主管）が話し合い4月7日の月例常務理事会で承認を求める意向。

作戦タイムについては昨夏の国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）総会でポーランドが提案、ヨーロッパでも話題となっているもの。

強化委の人選すすむ

米春の世界選手権に備え

5月中に新・全日本編成か

日本協会・荒川清美理事長は3月10日の月例常務理事会で、ナショナルチームの編成につながる強化委員会の発足について「4月中に人選を終わり、5月中には男子ナショナルチームのアウトラインを固めたい」と語った。

◇

強化委員会は本誌前号既報のとおり、今後の男女頂点強化施策の中心となる機関で、同委が編成されないかぎり、米春に迫った男子世界選手権への対策はいつまでも白紙のまま。

このため荒川理事長は2月末、技術、審判、普及指導のいわゆる競技3部長と協議、早急に強化委のスタッフ造りをすることとし人選にとりかかった。このメドが3月中にはつきそうで、そうなればただちは第1回強化委員会を開き48年度ナショナル（男子）チームについての検討に着手する。

荒川理事長の意向は、強化委によってまずナショナルチームのコーチングスタッフを選び、そのコーチングスタッフと強化委が合同会議を開き選手の指名を行うようだがこれまで頂点強化の青写真を造ってきた技術部との関連はいぜんあいまいで明確な一線が敷かれていない。この点での調整も急務ではなかろうか。

なお、女子については世界選手権のアジア予選が流会となり、日本の本大会出場が決定的となったため―別掲―新局面に立たされた。しかし、すでにナショナルチームの監督には井蕪・大洋デパート監督が決定しているだけに男子より頂点強化は円滑にコトが運ぼう。

イスラエル「自国開催」を示す

世界男子選手権アジア予選

本誌既報のとおり来春2月28日から東ドイツで開かれる第8回世界男子選手権は参加申しこみ国が32ケ国と本大会出場国（16）の倍に及んだためかってない多数の地域予選試合が組まれることになり5回目の出場をめざす日本はアジア代表をかけてイスラエルとの対戦（2試合）が国際ハンドボール連盟（IHF）から義務づけられた。

この報に接するやイスラエルは早くも来春（注・予選期日は今秋10月15日から来年1月15日まで）同国に日本を迎えて2試合を行いたいという意向を日本協会へ打電してきている。

IHFの発表が2月24日、とイスラエルの意向（書信）は26日同国発という早手まわしで、アジア予選必至とみてひそかに準備を進めていたとみてもよい。

日本協会は、このイスラエルの〝行動〟にいささか機先を制せられた感じで3月10日の月例常務理事会では治安上の問題を話しあうことが先決という意見に終始し、イスラエル側への回答に見合う結論はでなかった。

しかし、他のアジア諸国がエントリーしなかったため、アジアの両極端に位置する日本・イスラエルがホームアンドアウェイで対戦することは不合理だけに、どちらか一方で2試合を開催することは決定的といえ、今後の成り行きが注目される。

なお、イスラエルスポーツ連盟理事長のラルキン氏が所用で4月初旬に来日するため、この問題について日本協会荒川清美理事長らは話し合いを行う模様。

男子の世界選手権でアジア予選が行われるのは初めて。ミュヘン・オリンピックアジア予選は46年11月日本で開かれ日本、イスラエル、韓国が2回総当りを行っている。

荒川理事長の話　早々とイスラエルが自国開催を打ち出して来たのには驚いた。テルアビブには一万人収容の大体育館ができており25周年記念祭の一行事としてこの予選を行いたいということだ。

日本も遠征よりホームゲームを希望しており簡単にイスラエルの申し出には応じられない。昭和44年に遠征した時はセメントコートだったということもあり、ラルキン氏に会えれば施設など初歩的な条件も慎重に質すつもりだ。

木野選手に関西スポーツ賞

関西のスポーツライターで組織されている関西運動記者クラブはこのほど「昭和47年度関西スポーツ賞」の個人表彰者として木野実選手（湧永薬品、立大出、27才）を決め、3月8日大阪で表彰した。

木野選手の国際試合における活躍が認められたものだが、ハンドボール界から特定の現役選手が単独で表彰されるのははめずらしく、本誌の調べでは昭和26年に皆川茂夫（日体大OB）、同27年に新山末子（岡山倉敷青陵OG）の両氏が「読売・日本スポーツ賞ハンドボール部門賞」を受けて以来のことである。

日韓高校女子の交流は濃厚

日本体育協会は3月23日今夏東京駒沢などで開く予定の第6回日韓高校スポーツ交歓競技会の準備打ち合せ会を開き～徳永副会長出席～実施競技などを協議した。

その結果、懸案の女子ハンドボールの追加を申し合せ、4月中旬、来日する韓国側代表との話し合いへ持ちこむことになった。女子の実施については韓国ハンドボール協会の方が日本協会よりも積極的な時期があり実現の可能性は濃い。なお、ハンドボールは男女とも8月18日に東京都代表校が、20日に全国代表校が対戦の予定。

ギョッピンゲン、強力な布陣

日本勢「単独で1勝」の宿願成るか

14日来日

日本協会は4月来日の西ドイツ昨年度チャンピオン「フリッシュアウフ(FA)・ギョッピンゲン」—男子—一行30名の来日日程などをこのほど正式発表した。

それによると、同クラブは4月14日午後、空路羽田に到着、別表のとおり、15日から18日までに全日本チャンピオンの湧永薬品(大阪)ら日本の単独3チームと対戦、19日帰途につく。

来日メンバーは本誌締切り日(3月25日)までに正式発表は行われていないが、今シーズン西ドイツ全国リーグ(ブンデス・リーガ)に登録されていたブッヒャー(オリンピック代表)をはじめ15選手とみられいずれもヨーロッパ屈指の名門チームの主戦選手らしく攻守兼備の一流揃いだ。

ブッヒャー(1m76、72K)は今が絶頂期。ミュンヘン大会では5試合を20点をあげており、派手さはないが堅実なプレーには定評がある。今回は来日メンバーからもれたがライトエン(GK、1m83、88K)は、3年前の世界選手権時がピークで、ミュンヘンでは名手ボーデ(ハンブルグSV)、カーター(グンメルスバッハ、46年来日)のカゲにかくれていたが豊かなキャリアを活かしたプレーは定評がある。このライトエンのゴール・キーピングが見られないのは残念である。

オリンピック代表からはもれたがミョラー(1m79、75K)の名を知る読者は多いだろう。

ルプキング(ネッテルスタット)シュミット(グンメルスバッハ、46年来日)ムンク(ダンケルセン、昨春来日)らとともに西ドイツナショナルの主力として活躍した花形プレイヤー。西ドイツリーグの個人得点でもつねに上位へ名を連ねている。

異色はパッツァー。オーストリア国籍でオーストリアナショナルの一員でもある。しかし、ほとんどのハンドボール活動をFA・ギョッピンゲンで行っており、ヨーロッパ球界というのは実に面白い仕組みだと思う。1m94、94Kという巨漢で、2月のフランス国際トーナメントでは23点(4試合)をたたき出しておりその力感あふれるプレーは注目を集めよう。このほかかつてのナショナル選手フリョガー、今春の世界学生選手権で活躍したフイッシャー(1m78K)、新進のドン(1m91、75K)らが中心。もう一人の学生選手権代表エムリック(1m94、80K)も参加し、若々しい攻撃陣が編成されよう。

オーストリアナショナルのパッツアと西ドイツジュニアを含め、新旧人のナショナルプレーヤーをようしており、そのチーム力は非常に高く評価されている。

今シーズンの同クラブはヨーロッパカップではベストエイトまでで退いたが、西ドイツリーグ(ブンデス・リガ)では出足の不調を中盤から挽回、堂々南地区で首位となり、決勝トーナメントに進んでからは北地区2位のGW、ダンケルセン(昨春来日)を降し、決勝(選手権争覇)へ進出、北地区1位のグンメルスバッハ(46年来日)と3月10日ドルトムントで一万をこす大観衆のなかで対決し、惜しくもで破れ準優勝におわった。(25頁参照)

× × ×

一八九六年(明29)にクラブが創立され、ハンドボール部も50年近い歴史がある。これまでに西ドイツチャンピオンになること11回(7人制で9回、11人制で2回)の優勝をとげ、ヨーロッパカップも一九六〇、六一年に連続優勝の偉業を飾っている。

過去に来日したどのクラブよりも輝やかしい伝統と球歴をもっているといえ、ヨーロッパ各地には熱烈なファンをもっと伝えられる。ホームコートのスポーツホールでオリンピックの日本対ユーゴ戦が行われたのは記憶に新しい。

またかつて、ハンドボールの神様とも呼ばれたケンパ氏(32年来日)をようしそのケンパ氏が永くコーチをつとめていたチームとしても日本には名高い。ケンパ氏のコーチを受けたことのある選手も日本にはかなりいる筈である。いずれにしても日本とはなじみの多いチームである。

一方日本側チームは、全日本実業団1位の大同製鋼(愛知)、関西学生界の新進・全京都産業大、全日本1位の湧永薬品の順で迎えうつ。シーズンはじめてであり、必しも好コンディションとはいえぬが、いずれもこの試合に備えて特別練習をつづけており、攻守のまとまりにかけても定評があるだけに、興味深い対戦となろう。グンメルスバッハ(46年4月)、TH W・キール(47年3月)、GW・ダンケルセン(同4月)と三つのシリーズで日本側は全日本の3勝に留り、単独チームは9戦全敗、どうしてもここらで「1勝」をあげたい。なお、国内における日独親善試合は昭和13年9月のヒットラー・ユーゲント来日を第1回に11度目。

来日決定メンバー

監　督エドムント・マイスター

GK　H. フィンク・バイナー (20)
　　ハンス・ブロドベック (24)

FP　○パウル・エップレ (25)
　　○ウォルター・フリヨガー (33)
　　ヴォルフガング・ドン (23)
　　※クリスチャン・パッツアー (29)
　　○マックス・ミョラー (27)
　　◎ペーター・ブッヒャー (26)
　　ギュンター・シュヴァイカルト (24)
　　ヴェルナー・フィッシャー (22)
　　ヴエルナー・アルント (28)
　　ジグムント・ジーガー (24)
　　デレフ・グロス (22)
　　フランク・ヴォーラベ (20)
　　A. エムリッヒ (21)

◎印はミュンヘンオリンピック代表
○印はナショナルプレイヤー (A)
※パッツア選手はオーストリア国籍で同国ナショナルプレイヤー

日　　　程 (全3戦)

4月15日午後3時30分
　対大同製鋼 (愛知県体育館)
4月16日午後6時
　対全京都産業大 (京都市体育館)
4月18日午後6時
　対湧永薬品 (大阪市中央体育館)

活気あふれたジュニア初合宿

全日本ジュニア（ヤング・ナショナル）の初合宿が3月4日から8日までの5日間東京・日本青少年総合センターで行われた。

◇

□……若い、大きい、そして熱っぽい。注目の全日本ジュニア強化合宿は期待どおりの成果をみせた。

3月初旬といえば、社会人にも学生にも高校生にも〝忙しい時期だが社会人、学生は全選手が姿をみせた。最年少の佐藤（中大付高2年）は合宿から試験に通うほどで、誰もがこのチャンスを活かそうとする意欲にあふれていた、といえる。

□……その熱気がこの合宿のすべてであった。技術的にはナショナルなどの練習を見た目にはたしかに荒さが目立つがスピード感、力量感は相当なもの。勝技術部長や槇蔵夫氏（下関中央工監督）らコーチングスタッフも「すべて思い切ってプレーしている。すがすがしいですよ」とこのムードにすっかり満足していた。

□……高校生5人（大島—下関中央工—は試験のため欠席）を参加させたことが思わぬ効果を招いた。大学生が引きしまり、社会人が張り切ったのである。「何をやっても高校生と比較されそうでこんな気をいれた練習ははじめて」とある学生選手はいっていたが、どうやら本音のようだ。一方、高校勢は多くの視線をあびながらさすが現代っ子、憶せず堂々の攻守だった。なかでもジュニアではもちろん、ナショナルの最長身・飯田（大崎電気、188cm）をもしのぐ蒲生（中大付高、189cm。中大進学が決定）は注目の的。当人は「高校とはプレーがまったく違いますから……」とマイペースだったがそのスケールの大きい攻撃は将来を楽しませるに充分だった。

□……木野、（湧永薬品）、本田（大阪イーグルス）両全日本選手がコーチの肩書きをつけて参加していたのも新鮮。「指導だなんておこまがしい……」と照れながらも、彼らの一つ一つの動作には〝説得力〟がある。

これまで日本協会にはナショナルチームの伝統を築こうとする姿勢が乏しかった。ナショナルは所せん寄合い世帯という甘い考えが、オリンピック出場でただされた。木野も本田も「ナショナルの新人」という目でジュニアを見ていたようだ。いいことだ。

□……来春の世界選手権で、日本はアジア予選（対イスラエル）を勝ち抜けば本大会で東ドイツ、ソビエトそれにアメリカ大陸代表と予選リーグを競う。東ドイツ、ソビエトは優勝候補の双へきで、力で押しこんでくる日本の苦手なタイプだ。日本協会役員の一部に、いっそ勝敗を度外視して若手の全日本を送りこみ将来への布石にしたら、という声がある。

□……ミュンヘンの反省として長期的な頂点強化施策が切望された。4年といわず8年計画ぐらいはという意見もあった。

ジュニアへの期待はこれからいっそう強まると思う。これは日本だけの傾向ではない。ヨーロッパ各国はこれまでのナショナルA、Bのほかジュニアをもち、あわせて60名近いナショナルプレイヤーをかかえることが〝常識〟になってきている。国際ハンドボール連盟（IHF）も一九七五年（昭50）か七六年にジュニアチームの世界選手権を考慮していると伝えられる。

□……ジュニアの編成によって日本のハンドボール界もようやく一貫した頂点への姿勢を示したといえ、それだけにこの初合宿は大きな意味をもっていたのだが、その期待に充分応える成果をあげて終った。コーチ陣の熱意もさることながら、選ばれた選手一人々々の「やる気」が最大因であった。

□……ミュンヘン・オリンピックへの参加を、いちばん大きな刺激としてうけとめたのは若いハンドボールマンたちである。「僕たちにもチャンスが……」という希望は大きくふくらみ、とりわけジュニアに選ばれた29人の若者は、その気持ちを「次は僕たちだ」と一歩強め進めたのだ。選手にとっても日本協会にとっても〝価値ある5日間〟だったといえよう。

全日本ジュニア

▽GK 柳川兄（大同製鋼）、福井（中京大）、柴田（法大）、斉藤（日体大）、小松（湯沢高）▽FP 林、沢田（以上大崎電気）、藤井（湧永薬品）、柳川弟（大同製鋼）、中水流（海上自衛隊鹿屋）、細江、喜井、菅野（以上日体大）、上村、藤木、大熊（以上中大）、穂積、津川（以上大阪経大）、牧野（同志社大）、福井（京都産大）、夏目（中京大）、中村（大阪体大）、菊池（早大）、村田（法大）、蒲生、佐藤（以上中大付属高）、大島（下関中央工）、梅林（清水市商）、関（笠間高）

＝以上29名

中学選手 全日本ジュニアには未発表 昨秋11月のメンバー発表時、中学生3選手が含まれていたが、学業に支障があるとの判断からこの合宿には招かず、結局氏名も公表されないままに終りそうである。

ジュニア合宿を初指導して

槙　敏夫

共に勉強し、練習を通して技術の向上は勿論、精神的にも大きく前進してくれることを念願し、わずか五日の合宿ではあるが期待をもって参加させていただきました。

初めのうちは緊張感や不安が多少あったのか堅い動きで心配しましたが次第に緊張もほぐれ、調子もあげ若人らしい気力のあふれた練習であり、コーチも技術部長の発案で思い思いのスケジュールを立てたが当然のこととして基礎技術を根底とした、しかも一連の指導案で選手も大切なものか何かを考えさせられ得る所も多く大いに成果をあげた合宿であったと思います。選手達も期待通り気迫にあふれ一つでも多く覚えようないでも身につけようと、バットで打たれるスピードボールに跳びつきコーチの助言に熱心に聞き入り、木野、本田、野田コーチの実技指導に目を輝かせ終始真面目にかつ積極的な練習態度でハンドボールをいかに愛し情熱を傾けているかを知らされ好感がもてました。

私は世界の一流選手は知りませんが、日本のしかも、現在の選手はどこやれるか、どこまでやらないといけないかは判って来たと思います。

それが世界に通用するしかないかは別として、ハンドボール界あげて技術向上を目指してあるだけの力を出し尽して若人達の発展のため努力しなくてはならないと痛感しました。三十名近い世帯で選手の顔を覚えるのに苦労しましたが、この合宿を通してコーチ陣選手間のコミュニケーションもスムーズに行き大きな事故も怪我もなく無事第一回の合宿が終了した事を心から嬉んでいる次第です。

ジュニア強化の問題点

①協会本部も選手自身もジュニアの強化対策がハンドボールの浮沈にかかっていることを自覚して貰いたい。

②指導体制の確立

③ハンドボールの技術向上の意の科学的分析

以上三つを強化の問題点としてあげたい。昔ながらの練習法をより効果をあげるために整理し新しい練習法の研究。監督（責任者）の決定、監督がプログラムを作成し目標と内容を指示し、それぞれ専門のコーチがそれに適合した処方箋を作成。目的達成に努力し選手の指導にあたり、合宿途中で、「選手」――「コーチ」――「監督」と逆のコースを何度も往復して目標達成の状況を知り、その都度新しい処方箋を加え指導してみては？

最後にいつも皆が口にすることではあるが底辺の拡大に全力をあげること、高校、大学とハンドボールをやって来た者の指導も大切であるが小学校いやそれ以前の指導に力をそそぎ多くのハンドボール愛好者のなかからの真の選抜者でなくてはならない。多くの支援者のなかでえらばれた選手は当然のこととして自覚も生まれ益々精進するのではないかと思うものである。

（筆者は全日本ジュニア・コーチ、下関中央工高監督）

会　告

日本協会では48年4月1日から事務局（職員）の週5日制～隔週・日月～を施行することになりました。月曜日の業務依頼はなるべく軽減されて協力下さるようお願いいたします。

各　位

日本ハンドボール協会

ユーゴ招待，有望に

9月来日，6試合か

日本協会は昨冬来、ミュヘンオリンピック優勝国ユーゴスラビアの招待について検討を進めていたが、日本の示した縮小計画をユーゴが了解したことから事態はわずかながら好転、今秋来日の希望を強くしている。

日本協会新体制の最初の大仕事とみられている金メダルチーム・ユーゴスラビアの招待は、ユーゴ側の要求した「20名分の全経費日本側負担(概算千三百万円)」が大難関となり2月の全国評議員会、同理事会も議論は行き詰まったまま、新常務理事会の〝努力〟に一任して終った。

このため新春からつづけていた田村会長、実連会長を兼ねる林副会長、荒川理事長らの多範囲な活動はいっそう強められたのだが曙光を見出せず、3月に入って、荒川理事長を中心に招待計画のねりなおしが行われた。その結果、3月10日の月例常務理事会では「招待人数を17名（役員3、選手14）とし招待期間は10～11日間（6試合）」という縮小案を作成（概算七百六十万円・宿泊経費別）、この旨相手側へ伝えた。

これに対しユーゴ協会は3月20日夜、英国航空（BOAC）を通じ「承諾」の回答を日本協会へ連絡して来た。

日本協会は、オリンピック優勝国を招待するチャンスは二度とつかめぬかも知れぬことや、「ユーゴを是非観たい」とする世論に応えるべく、この回答から一気に〝決定〟まで押し進める意向だ。

今のところ、期間は8月31日（来日）から9月10日（帰国）までの11日間。来春の世界選手権を目指す新・ナショナルチームもそれまでには当然編成を終えており絶好の強化対策になるだろう。

なお、日本協会はこの件について4月7日の月例常務理事会（東京）で話合うことにしており、早ければ次号で朗報をお伝えできよう。

実現すれば、斯界初の金メダルチームの招待だけに日本のナショナルチームはもちろんハンドボールファンにも大きな刺激を与えよう。

当面する課題について 荒川清美理事長にきく

――44年上半期に合議制が布かれた時を除いていわゆる荒川体制もすでに3期（約6年）の実績を積んで4選の新年度は〝発展期〟との期待が強いのですが

荒川理事長　おかげさまで46年のオリンピックアジア予選、昨年のミュンヘン出場という大事業を完遂したことで、日本ハンドボール界に注がれる耳目はいっそう強まりました。それだけにこれまで以上の努力が必要なことも覚悟しています。大事業を行えたのは選手の精進はもちろんですが、中央地方を問わず役員各位の協力があったからで、このムードだけはかつてないものと自負できます。

――その姿勢を維持することが今後の活動のポイントですね

理事長　理事長色を強く打ち出しワンマン的な運営が競技団体には必要だという声も聞きますが私はそうは思っていません。つとめて合議制をとり執行部の連帯感を強め常務理事一人々々が理事長である、という気持ちになって欲しいと思うのです。

――48・49年度にいちばんなさりたいことは、

理事長　基本的には「頂点強化」と「普及」の二本建てをより推進するということだけで、特に新しい考えはありません。

頂点強化は、ミュンヘン・オリンピックを観て、一朝一夕で強力なナショナルを造ることができぬことを改めて知りました。ミュンヘンの場合も、斯界ではかつてない長期的な強化対策を採ったのですが底が結局は浅いのです。ジュニアナショナルからナショナルへといったルートを確立させ、〝ナショナルの底辺〟を拡充したいと思います。

「普及」に関しては地域社会とハンドボールの結びつきといろものをテーマにしたいと考えています。昨年から始めた全国中学生大会はその面での一つの動きとしてみていただいてよいでしょう。運営面では法人化への準備をより積極化します。

――地域社会との結びつきについてもう少し具体的に話して下さい

理事長　例えば今年から一般の登録をABCに分けましたが、Cを中心にして市町村単位のハンドボール協会結成を促進させたいと思うのです。全国クラブ大会はなかなか難しいと思いますので、一般Cのクラブの大会を「全国都市対抗」といったタイトルで大会を開けないものかという夢をもっています。

――中学校大会が地域社会への密着手段の一つということになれば当然、参加校数も増えてよいわけですが

理事長　そうです。理想は各都道府県から一校の代表を集めることです。今夏は昨年並みに各ブロック一校ですが、各ブロックから単一校チームその他のピックアップチームといろ案は、どうかと考えたことがあります。単一校、ピックアップは大会期日、場所は同じとしても別々にトーナメントを行うのです。

――日本協会の宿命的な課題といわれる〝財源の確保〟について対策は

理事長　もはや加盟金、登録料が限界に来ています。その他の収入の道を考えるべき時、などというよりガケっ淵に立たされているのは事実です。

しかし、特殊の企業体などに泣きつくことだけは絶対にしたくないというのが田村正衛会長の信念であり、私もそれに異存はありません。自分たちの行事は自分たちの力で侑うのが筋道です。

――といっても、収入増を考えねば協会事業の進展はないでしょう

理事長　競技団体は競技団体らしいお金のもうけかたがあるのです。例えば世界選手権やオリンピックのあと、単なる報告書を出すのではなく「世界のハンドボール技術」といった本を日本協会が出版したり、国際試合の開催権料を確立するのも早道です。

――競技収入をあげるには国際的な実力を高めることが必要ですが、その点希望はありますか

理事長　私は日本人特有のスピード、変化に富んだプレーによって世界の最上位へ躍りでることができると確信しています。そのために先ほど述べたような段階的な頂点強化対策を採るつもりです。ミュンヘンは11位と目標の〝一桁〟は成りませんでしたが、この11位を出発点にモントリオールから一九八〇年のオリンピックへとつなげるべく4年、8年計画をたてます。

――新設の強化委員会がその軸となるわけですか

理事長　技術部との関連など強化委員会そのものの課題も実はあるのですが、少くともナショナルプレイヤーとしてこれだけはという最低の条件（技術）は今年内につくり出す予定です。技術・審判・普及各部はもちろんナショナルプレイヤーからも充分話を聞き、将来への大計をねりあげます。

――強化委員会の職務はそうなるとナショナルの強化だけになりますか

理事長　そうです。

――ナショナルのいわゆるプロダクション化に近づくわけですね

理事長　ナショナルの独立採算制はたしかに一つの研究課題です

――男子の伸びに比べて女子はもう一つといわれますが

理事長　これはやはり指導者の問題でしょう。男子の場合はOBが面倒をみるわけですが、女子はなかなかそういかないようです。

女子指導者だけの講習会、あるいは高校女子優秀選手の研修会など、女子施策を具体化させたいと思います。

私自身は、世界への道は男子よりむしろ女子のほうが早いと感じているのですが。

――「日本リーグ」の実施を望む声が高まっていると聞きますが

理事長　今すぐにとか、来年からとかいう構想を私自身は持っていません。公式に話し合ったこともまだ一度もありませんが、頂点強化の基盤として考えるべき時期には来ていると思います。

――日本リーグ実施をためらう

なにかがありますか

理事長　特にありません。しかし私は、地方選手のレベルアップ、地方協会の役員養成、運営力増強のために「全国選抜△△県大会」といった名称で例えば実業団2、学生1、地元1による大会を開催するよう地方協会に呼びかけたいと思うのです。日本リーグはそのあとから実現させても遅くはないでしょう。

——国体の改革についても議論が多いようですが

理事長　すべて日本体協が改正に踏み切る昭和50年以降に考えたい、というのが本音です。

参加人数については現在施設手いっぱいのところまでこぎつけることができると思いますが、最大の課題は各所で議論されているチーム数をいかに分配するかでしょう。年ごとに分配数を回転させていくか、成年男女をさらにどのように細分させるかは引きつづき普及部で検討してもらうつもりです。

有力チームや優秀選手を辞退させたらという意見は、私自身なかなか決断できないものがあります。しかし、基本的には国体は国民体育の向上というその趣旨から発想して、社会体育色を強めるべきだと思っています。

——新しい事業について計画はありますか

理事長　中学大会の実現で一段落というところです。

高専大会については全国高専大会種目への参加を働きかけています。いささか中途半端な性格になったNHK杯（全日本選抜）は単発的な国際試合にすることを考えています。

——話は少しとびますがアジアにおける日本、中国との交流などについての考えは

理事長　国際ハンドボール連盟（IHF）が地域別の主体性を認め、渡辺和美副会長がアジア選出理事になったことなど、アジア地域での我が国の立ち場はいっそう強められたといえましょう。しかし、スポーツと政治ということを抜いて対処できぬ最近の傾向であり、押す時は押し、引く時は引く見きわめを慎重にしたいと思っています。

中国問題については、すでに日本協会は日体協、日本オリンピック委員会（JOC）の態度を尊重することに決めており、改めて申しあげる点はありません。

中国ハンドボール界も復活の体制が整えられたと伝えられ、その交流に魅力は感じています。IHFがどのような姿勢でのぞんでくるかは今のところ判りませんが

——世界選手権、オリンピックのたびにアジア地域予選が開かれるようだと、国内事業、財政面への影響も少くないハズですが

理事長　こうしたエベントをすべて東京、大阪、名古屋で開くというのではなく、その他の都市にも積極的に持っていきたいと考えています。そうでなければ、たしかに国内活動に支障をきたすでしょう。

——再び日本協会の運営について伺います。人事面での若返り待望論についてはどうお考えですか

理事長　何才を基準にして、といったものではないので難しい問題です。

協会機構内のある部門では〝若さ〟が必要であり、あるセクションは〝経験〟が欲しいということもあります。ケース・バイケースで処理するつもりです。

一がいに若返りといっても、コタツに入って聞く老人の話も味わいがあるように旧人のよさがあるのです。

もちろん、人材登用にあたっては多範囲に視野を拡げ、若い層の開発をおろそかにするものではありません

——全国評議員会制度の検討が一部で望まれたといわれますが

理事長　やはり各都道府県協会を代表して出席されるからには、県内事情に精通したかたが出席されるべきでしょう。その意味で代議員制度の検討を田村会長が要望されたわけです。

——最後に理事長として本誌への注文を

理事長　編集方針、内容については特にありません。

読者がもっと積極的に誌上で発言して欲しいと思います。

選手も地方役員も日本協会に対する率直な意見を述べる場として活用してもらいたいものです。

——長い時間ありがとうございました。（3月20日・日本ハンドボール協会室で。文責・編集部）

荒川理事長、日体協理事に

日本体育協会は3月22日東京渋谷の岸記念体育会館で新年度役員による評議員会（競技団体37、地方団体47）を開き、注目の役員改選（投票）を行った。

その結果、日本ハンドボール協会の評議員荒川清美氏（理事長、日体大教授、51才）ら競技団体選出15人、地方団体選出7人が理事に選出された。地方団体選出のなかでは日本ハンドボール協会副会長でもある神奈川体育協会の評議員保坂周助氏が重任となった。

日本ハンドボール協会の評議員が日本体育協会理事に選ばれたのは昭和40・41年度の高嶋洌氏（当時理事長）につぎ荒川氏が二人目である。荒川氏は評議員初出馬で理事の座を得たもの、今後の活躍が各方面から期待されている。

なお、荒川氏の理事選出にともなう評議員の補充については未決定。

東海協会の日程　東海協会はこのほど48年度の主要日程を次のように決め発表した。

▽第9回東海実業団選手権　5月13、27日（名古屋）▽第4回東海地区中学校大会6月17日（愛知県）▽第20回東海高校選手権6月23、24日（岐阜県）▽第28回東海選手権　8月25、26日（静岡市）▽第4回東海クラブ選手権10月7、28日（名古屋）▽第13回東海室内選手権　49年2月24日（名古屋）▽第2回東海高校室内大会　49年2月24日（名古屋）

昭和48・49年度 専門担当理事に新構想を聞く ①

審 判・安藤 純光

一昨年秋のアジア予選を前後して、かつてないほどのヨーロッパのチームが次々と来日し、われわれの目にヨーロッパのハンドボールを紹介してくれた。またオリンピック大会には多くのハンドボール関係者が日本ハンドボールチームのはれの舞台を見て声援を送った。

これらの国内での一連の国際試合を見て、またミュンヘンへ行った人々の話を聞いて強く感じられることは、今さら言を新らたに云うまでもないことであるが、審判技術とハンドボールの技術の因果関係である。いうまでもなく審判員は直接プレイヤーの技術に影響を与える立場にある。より高度な審判技術を探求することがこの道につながることになる。

審判員に対する批判の声は審判員諸氏の努力によって、一時ほどではなくなった。これは別問題としてもプレイヤーのたゆみない技術追求と同様に常に審判技術の高度化を目指すことは審判員として当然のことであり義務である。

審判部の目標は一にも二にもここにある。この目標を達成するための充分な施策が計画されなければ

普及指導・渡辺 慶寿

ハンドボールの愛好者の一人として常日頃考えていることは、より多くの人々にハンドボールという競技を知ってもらうことである。現代社会において、スポーツは多くの人々にうけとめられてきたが、スポーツの一端を担うハンドボールには、今だ多くの人々には受けとめられていない。

これが亜流スポーツに甘じている大きな原因となることは事実である。「より多くのチームがあったならば」あるいは、「より多くの選手がいたならば」とこれが指導者としての悩みであり、選手の悩みでもある。最終的には、このような悩みがあるにしても、それ以前の問題としてハンドボールのあらゆるパターンを問うていかなければならないことである。すなわち、その原点に立つことによってあらゆる角度から出発しなければならないのである。底辺の拡充とは、いろいろな意味がある。広くスポーツをわれわれの生涯の教育の一貫としての身体活動をとらえるならば、その中でのハンドボールがどのように貢献させてゆくか、個々人を対象としての学校体育、社会体育をどのように進めれ

総務企画・杉山 茂

構想・目標・夢などを思いつくままに書き並べてみよう。

①日本ハンドボールリーグ発足へ具体的な検討

②ハンドボールマンクラブ～OB球友のサロン～の設立

③都道府県協会直営クラブの育成

④チーム登録の発展的解消にともなう個人ライセンス制度の施行

⑤ハンドボール・ライターズクラブ（専門記者会）の発足促進

⑥「日本ハンドボール史」の編纂

⑦ハンドボール専用体育館の建設

⑧国際競技会「ジャパン・トーナメント」の実現

⑨アジア競技大会、ユニバシアード大会への参加

⑩世界選手権の誘致

①はいささか渋滞気味の日本協会事業の突破口として積極的に取り組みたい。私個人はあわよくば来秋スタートをと目論んでいるのだが、いぜん世論は賛否半々、問題の大きさを痛感させられている。

②は、いわゆる球界の長老、協会OB、往年のプレイヤーたちの〝球交〟を再び甦えらせようというのが狙い。ビッグゲームへの御案内、夕食会……。時には親睦試合も試みたい。この企画が軌道に

編 集・藤本 強

編集部長になってから三期、六年の歳月が流れた。42号からだから本誌まで66回の雑誌を出したことになる。

早いもので、何となく6年の月日が流れていってしまった。まがりなりにも、この間続けて雑誌を出してこられたのは、杉山総務部長の協力の賜ということがいえるであろう。

編集部長になった頃には、あるる程度のこうもしたい、ああもしたいということがあった。そのうちのいくつかは実行したが、そのままにしてきてしまったものもある。

この間、常に心がけてきたことは、本誌はハンドボール協会の機関誌というよりは、ハンドボール界の雑誌にしたいということであったし、ある。

この点については、読者の皆様には、必ずしも満足のいかない点も多かったと思う。というのは、いかにハンドボール界の雑誌をめざしたとしても、本誌はハンドボール協会の官報的な性格はどうしてもとりさることができないからである。

「ハンドボール」はどのような性格をめざすべきかもずいぶん考えた。一つの方向は純粋に官報的な性格に進み、ハンドボール界の

ばならない。これまでにも全日本大会審判員研修会あるいは各都道府県および各連盟の審判部長の参加を求めての中央研修会を開催して、この目標を達成するための事業が実施されてきた。一方審判員の審査についても、とくにA級・B級の審査は実技テストおよびペーパーテストを実施して、審判技術の向上と均一化を目指してきた。これら研修会、講習会、審査についてはその内容を充分に検討して、より効果あるものにしなければならない。

本年度審判部がもっとも力点をおく事業はこの意味で5月下旬に開催を予定している公認審判員中央研修会である。各都道府県において出席者による伝達講習が実施（義務づける）されることによって審判員すべてに意とするところが伝達されることによって審判技術の高度化と、競技規則の解釈の統一を実現できるものと考える。

審判部は、まだまだ多くの改善すべき問題をかかえている。これまでにもまさる御支援と御協力をお願いする。

よりよい審判技術、統一された見解これをめざして努力を重ねていくつもりである。

ばよいのか、という基本的な体制をとなえることが結論となろう。

偶然性を求めてゆくことも一つの道であるかも知れないが、われわれとしてみれば、それを期待してはいない。従って、小、中、高、一般の段階を考えてのハンドボールの処方を作り上げ、全てを網羅していかなければならない。普及指導部としては、個々の問題点をほりさげてゆくことも策であるとは考えるが、今年は、少なくとも普及対策体系的なものを早急につくりあげ、その体系にもとずいて一つ一つの仕事を完成してゆくことになる。それが底辺の拡充であり、それが頂点強化につながってゆくことになるであろう。

以下昭和48年度の普及指導部のプログラムである。1、普及対策の作成。2、小学生ハンドボールの指導(法)体系。3、中学生ハンドボールの指導(法)体系。4、年令別（性別）の指導（法）の体系。5、第2回ハンドボールテキストブックの作成準備。6、指導用スライドの作成（技術編及びルール編）7、全国各都道府県普及指導委員会議。8、弱少県との連絡及び対策。9、各種大会派遣。10、教育系大学ハンドボール大会の設定準備（可否そしてその内容）

普及とは、着実な歩みであり、愛好者一人一人の私がなければならないと考える。

のれば⑥もスムースに運ぶ。

同じ「クラブ」でも⑤は難関だ。報道関係各社にハンドボール専門記者を置いてもらうためにはそれだけのメリットが必要。斯界の事業内容いかんにかかっている。

③は近頃「××県に転勤するのだが、そこにハンドボールクラブはありますか」「気軽るにハンドボールのできるクラブを紹介して下さい」といった問合せが多いことをヒントにした。所属母体から離れたり失ったりした個々の愛好者のために都道府県協会がクラブ（チーム）を持って定期的な練習・試合をしたらどうだろう。市民スポーツ活動の一環にもなるのではないか。④は欧州のシステムの採用である。少くとも高校を除いては個人ライセンス（個人年度登録＝有料）制度を布きたい。チーム登録は一度名儀届出（有料）をすれば半恒久的に有効とする。高校は現行のままというのが私案。⑦⑧⑨⑩は遠大な理想ともいえるが、⑧は協会創立40周年記念事業（昭和52年2月）にどうだろう。そして⑩へつなぐのだ。現実ばなれした話ばかり並べて……とお叱りをうけるかも知れぬが、今や総務企画部は事務局堤慎、森岡美子両氏の活躍のおかげで本来業務の庶務、雑件への手がほとんど省け、ひたすら将来構想に全力投球できる体制にある感謝したい。

記録、日本ハンドボール協会の方向決定を事こまかに伝え、あるいは後世に残すことであろう。もう一つの方向は、今後のハンドボール界のめざす方向を見つめ、ハンドボール界のいわばオピニオン・リーダーとして、ハンドボール界の世論作りにつとめるということであろう。

もちろんここにあげた二つの例は極端な例であり、実際的この両極端の間をゆれ動くことになってこよう。できることなら、そのゆれ動きを後者、すなわち、今後のハンドボール界の方向というようなもののほうへ傾斜を強めていきたいと思っている。

今期の目標としては、やはり、「底辺の拡大」につとめていく方向にもっていきたいと思う。

今後のハンドボール界の方向としては、やはり、「底辺の拡大」「競技の普及」なしには、ハンドボール界の発展はありえないと思う。

クラブの発展と高校界、中学界への浸透、発展、これをまず心がけるべきであろう。

そのため本誌が果す役割は、やはり入門講座、案内書的な性格を強めていきたいと考える。しかしこれも本誌が読者の中へ入っていっていなくてはならない。知り合いの方へぜひとも本誌の存在を伝えて、購入をすすめてほしい。

審判審査委の改善決まる

日本協会は3月10日東京で月例常務理事会を開き、荒川理事長から発表された「昭和48・49年度日本協会審判委員会」のメンバー5名を承認した。

これまで、審判審査委員会は審判部内の一専門委員会であったがその分掌内容から「格上げ」の要望が内外から強まり、2月10日の全国理事会で会長直属あるいは理事長直属の非常設委員会とすることを決定、会長、理事長、審判部長に人選が一任されていたものである。

【審判審査委員会】 荒川清美（委員長）、佐藤敦、入江信太郎、村田弘、藤田八郎

＜解説＞「公認審判員の資格を審査する人の資格は誰がどうして決めるのか」といったまわりくどい議論がどうやらこれですっきりカタがつきそうだ。

荒川理事長は、今回の人選の基準を、「審判経験が豊かで、現役の審判活動をしていない範囲」に求めたと説明した。

審判部内の一委員会に留めず権威づけをしたいという意見も、審判員審判員てを審査することの矛盾から起因したもので、審査員の人選根拠さえはっきりさせておけば会長直属あるいは理事長直属などとしなくてもこれまでどおりで支障はないのではなかろうか。同委員会の業務が単なる「公認」の審査だけで終らず、全日本総合選手権のレフェリー指名を行えるようにしてもよいと思う。

いずれにせよ、審判部自からが部の体質を改善しようとする最近の姿勢は好ましいものであり、いっそうの充実を期待したい（X）

中国地区選出理事は丸口氏

選出の遅れていた中国地区の日本協会理事は丸口哲美氏（広島）の再任に決まった。これで定数（33名以内）のうち会長推せんの欠員1名を除き地域、加盟団体選出理事は全員出揃った。

海外駐在代表を推せん

新役員改選にともなう海外駐在代表（若干名）は3月の月例常務理事で次の2氏が推せんされ、海外連絡網を強化するため今後も積極的に人材を探しだすことになった。

【昭和48・49年度海外駐在代表】

▽ヨーロッパ地域　河内鋭雄（東大出、元日本協会理事、在イタリア）▽アメリカ地域　荘林康次（神戸大出、在ニューヨーク）

お願い　前掲のとおり日本協会ではこのほど海外駐在代表の増強を企ることになり全国高校、大学OBでこの任に適当な人材の推せんをお願いしたいと思います。心当たりのかたは是非、日本協会事務局あて、氏名、出身校（球歴）、在外現住所を文書でお知らせ下さい。

女子の部の新設を検討

全日本教職員連盟

全日本教職員連盟は1月の定例理事会で全日本教職員選手権に女子の部を併設する件につき協議、3チーム以上の参加が見こまれれば今夏の第16回大会（8月10〜13日・水海道市）から採用することを申し合せた。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃全チームもれなく登録を

日本協会は48年度から一般の部をA・B・Cに3分割する新方式を採りました。新界の競技人口確保、市民スポーツへの密着が狙いです。全国でハンドボール活動をするすべてのチームが日本協会登録されるように御協力下さい。登録用紙（横書き・新形式）を御希望のかたは都道府県協会または日本協会へ直接申しこまれ5月31日までに手続きをして下さい。

日本協会48年度登録料金（単位円）

種別		出場できる大会	登録料	個人登録料	モントリオール五輪基金	機関誌購読料
高校		あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	一五〇〇	／	三〇〇（別途請求）	一八〇〇
学生		あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	三〇〇〇	一人一〇〇	五〇〇	一八〇〇
一般	C	全国大会(国体を含む)の予選を兼ねぬブロック大会と都道府県大会のみ	三〇〇	／	五〇〇	義務づけず
	B	国体、ブロック大会、都道府県大会のみ	三〇〇〇	一人二〇〇	五〇〇	一八〇〇
	A	あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は制限をうける	四〇〇〇	一人二〇〇	五〇〇	一八〇〇

韓国遠征選手団選考会開催

全日本学連

今年の6月韓国で行われる予定の第7回（女子第2回）日韓学生交流試合に出場する選手選考会が3月13日午前11時から東京・駒沢体育館で開かれた。

選考会に参加したのは全国7学連（女子は3学連）によって推せんされた男子33（欠席2）、女子25選手で中沢重夫全日本学連理事長、藤原侑同技術部長らによる選考委員によってテストマッチなどが行われた。

全日本学連では4月中旬までに男女それぞれ14名の代表選手を決め発表することにしているが佐々木（中大ー三景）、木村（女子・日体大ー日立）らが卒業して男女ナショナルチームから現役学生が一人も居なくなったあとだけに、この学生ナショナルには〝次代の全日本〟の期待もかけられており、その陣容に注目が集まっている。

女子の全日本学生が外国遠征するのは史上初めてのこと。

なお、全日本学連は韓国遠征メンバーをそのまま第20回NHK杯（6月22〜24日・大阪）の学連代表として出場させたい希望をもっている。

昭和48年度

競技規則の改正点

日本協会審判部

1の4＝条文の内容には変化なし

1の3と同形の文章に改文

1の7＝新設。(したがってこれまでの1の7、1の8はそれぞれ1の8、1の9となる)

センターラインからそれぞれ3mの距離にサイドラインに接して直角の15cmラインを引く。これは交替位置の限界を示す。

(1の7・第4図も新設)

3の1＝末尾の文章が追加。

1チームは12名のプレイヤー(10名のフィールドプレイヤーおよび2名のゴールキーパー)で構成される。これらのプレイヤーのうち最高7名(6名のフィールドプレーヤーおよび1名のゴールキーパー)が同時に競技に参加することができる。ゴールキーパーはどのような時でもフィールドプレイヤーにはなれない。フィールドプレイヤーはゴールキーパーになることができる(第8条の13参照)

3の2＝(原注)を削除

3の3＝後段の文章を次のように改文。

不正入場をしたプレイヤーが反則した時には正常なプレイヤーの反則と同様にあつかう。資格のないプレイヤーが入場した時にはフリースローもしくは7mスロー(明らかな得点のチャンスの時)によって罰する。どちらの場合もこのプレイヤーは失格となる(第17条の20参照)。

3の3(注)＝新設。

「交替位置」とはセンターラインを中心にそれぞれのベンチのある側の3mの範囲である。この範囲外からの出入は不正交替である。

3の7＝1行目にある「積極的に」を削除する。

3の8＝5行目に次の文章を追加する。

胸には10cmの大きさの数字を、またパンツにも7cmの大きさの数字をつけなければならない

4の7＝旧条文の末尾に旧4の7(原注)が追加される

延長戦は5分間に

4の9＝改文。

競技の勝者を決定しなければならないと決められている時には後半を終了した時同点であれば5分の休憩ののち延長戦を行なう。

レフェリーは再びトスをし、トスに勝ったチームはサイドをとるかスローオフをとる。すべてのチームに対して延長戦の両ハーフは5分づつとする。休憩なしでサイドを交替する。この延長戦後なお勝敗に決着がつかなければ5分間の休憩と新らしくトスをしたあと5分づつの第2延長戦を行なう。サイドは休憩なしで交替する。

この第2延長戦も引き分けに終ったら、それ以後の処置は当該競技会の要項にしたがって決定する

5の3＝これまで4細目にさらefを追加する。

e、ジャンプしてキャッチしたとき同時に両足がつき、その後片足をあげ、その足をおろした時。

f、ジャンプしてキャッチしたとき同時に両足がつき、その後片足を動かした時。

5の4＝3行目に「意識的に」を追加する

……ドリブルはプレイヤーが意識的にからだのどこかで地面にむけはずませた時に始まる……

5の4(注)＝新設。

(注)「意識的に」とはボールカットの場合とか、ボールにからだをあてるような動作をいう。したがってからだにボールがあたった時にはボールをひろってドリブルすることができる。手のひらをかえすドリブルはダブルドリブルである。

5の6＝改文。

ボールを片手または両手でとめその後位置をかえず再びつかみなおすことはよい(第5条の8を除く)

5の6(原注)＝新設。

(原注)「位置をかえず」とは「場所を移動しないで」ということである。

6の3＝改文(これまでの6の3(原注)を条文とする)

相手がボールを持っていなくともからだで阻止することはできる。

6の10＝1行目を改文。

自己の競技場内で粗暴な違反行為をした時……

7の3(原注)＝削除。

7の8＝新設。

防禦側チームのプレイヤーが防禦する時にゴールエリアにふれてもボールがゴールキーパーにキャッチされるかボールがゴールエリアにとどまっている時には競技は中断されない。

8の3＝改文。

ゴールキーパーはボールをもたずにゴールエリアをはなれることができる。(第8条の12参照)

フィールドではゴールキーパーはフィールドプレイヤーに関する規則を守らなければならない

ゴールキーパーはゴールエリアライン外の地面にふれるやいなやゴールエリアをはなれたとみなされる。

8の3(注)＝改文。

(注) ゴールエリア外に出たゴールキーパーはその間フィールドプレイヤーとして種々の制限を受けなければならない。あくまでもゴールキーパーであることに変りはない。

8の12＝新設。(したがってこれまでの8の12は8の13となる)

ゴールキーパーはセンターラインを越えてはならない(フリースローまたは7mスロー、第14の1B参照)

9の1＝追加。

ゴールキーパーがスローの時あるいは倒れるなどしてボールがゴールに入った場合には相手側チームの得点となる(ゴールスローの時は除く)

10の1(注)＝新設。

(注) プレイヤーのからだの一部分がサイドラインを越えてもボールが競技場内にあれば競技

は続行される。プレイヤーのからだが競技場内にあってもボールがサイドラインを越えた場合にはスローインとなる（第16条の6を除く）

10の2＝改文。

スローインは最後にボールにふれたチームのプレイヤーの相手のチームのプレイヤーによって行なわれる。

10の3＝改文。

スローインはボールがサイドラインを通過した地点から行なう

10の4＝改正。

スローインはコートに向かって行なわれ、フリースローと同じくレフェリーの笛なしで行なう（第13の2及び5、第16条の1～5、7～9参照）。スローを行なうプレイヤーは両足をサイドラインの外側において立ち、サイドラインに沿って歩いたりボールが手からはなれる前に競技場に入ってはならない。

10の4（注）＝改正

（注） 完全にスローインの動作が終了するまでは片方の足が地面（床）からはなれてはいけない（第16条の4及び(注)参照）

17の5（注）＝新設。

（注） トスは主将もしくはチームの代表者であればよい。

17の7＝改正（旧17の22の一部移項などでA～Iまでとなる）

センターレフェリーは競技場の中でできるだけボールの近くにいて競技の動きを見る。基本的にはすべての競技に対して笛を吹く。次の場合にも笛を吹く。

（A）競技開始
（B）反則（とくに第13条の7、第14条の8参照）
（C）ボールがセンターレフェリー側のサイドラインを出た時（第10条の1参照）
（D）コーナースロー
（E）7mスロー
（F）フリースロー（第16条の3参照）
（G）第16条の9による競技遅延
（H）第17条の21による競技遅延
（I）レフェリー、プレイヤーに対するスポーツマンシップに反する行為。またレフェリースローを行なう。

第17条（後半）は大きく移動

17の13以降の新措置＝これまでの17の13の前段を17の13に、同後段を17の14とする。これまでの17の14は17の15となり、これまで17の14（原注）としていた内容を追加する。

これまでの17の15は17の16とし改文される。

これまでの17の16から17の19までは一項づつ数字が繰り下がる

これまでの17の20は改文のうえ17の21となる。17の21は（原注）が新設される。これまでの17の21は17の22となる。主な点次の通り。

17の15

レフェリーに対するプレイヤーのスポーツマンシップに反する言動は、どんな場合でも警告、退場、追放によって罰する（フリースロー）

レフェリーへの誹謗は次のように罰する

（A）競技前の時には当人は失格チームは12名で競技する
（B）休けい中の時には当人は失格、チームは11名で競技する
（C）競技中の時には当人は退場または追放
（D）競技後の時には警告とレフェリーの報告

ベンチでのスポーツマンシップに反する言動はプレイヤーでも役員でも警告もしくは失格で罰する

17の16

プレイヤーは2分もしくは5分間退場させられる。プレイヤーが同じような違反を犯して2回目に退場させられた時には5分間の退場となる。他のすべての場合はプレイヤーの犯した違反の種類によって退場時間は2分または5分間とする。プレイヤーが3回目の退場を宣告された時には競技の残り時間退場させられる（追放）。ただしプレイヤーの不正交替（第3条の7参照）とストーリングの場合を除く。

重大な違反があった場合にはそのプレイヤーは警告なしに追放される。退場時間が前半の終了時までに終っていない時には違反したプレイヤーは後半のはじめに退場時間の残りを退場している（第4条の9参照）。

退場させられたプレイヤーは退場者席にいなければならない。

退場させられたプレイヤーの交替はみとめられない。

17の21

チームが故意にプレイの進行をおくらせたり、明らかに得点しようとすることをさけていればこれをストーリングといいレフェリーは次のように判定する。

（A）1回目は「警告」してフリースロー
（B）2回目は主責任者を2分退場させてフリースロー
（C）さらにくりかえして行なわれた時にはその都度主責任者を5分退場させてフリースロー

17の21（原注）＝新設

「主責任者」とはストーリングの反則のために競技を中断した時にゴールの方向へボールを投げようとしていないプレイヤーをいう。

17の21＜申し合せ＞＝これまでの17の20＜申し合せ＞の一行目「…再び行なわれ…」を削除）

Ⅱ競技に関する留意事項・改正

3「フリースロー」について＝（4）のあとに（5）、（6）を追加（5）反則の笛とタイムアップの笛が同時に吹かれ、レフェリーが最後の一投を認めた時のフリースローは、プレイヤー全員にノータイムを知らせてから笛によって行なう

（6）ゴール前のフリースローの位置はゴールの中心と反則地点を結んだ延長戦上のフリースローラインの外から行なう

7「スローインについて」＝（4）（6）を次のように改める。

（4）ボールをもっているプレイヤーの足がサイドラインを踏んでもよい。ふみ越えた場合でもボールが競技場内にあればよい

（6）スローを行なうプレイヤーの足の位置に注意する（第10条の3参照）。

日本協会規程集を刊行 日本協会はこれまで一つにまとめられていなかった規約、規程、基準などを収録した「日本ハンドボール協会規程集」（タイプ印刷）を刊行した。頒価は1部200円（送料共）

種々のものに利用できますので各チームの方々もぜひとも利用下さるように、申しこみを待ちます。

本誌恒例

昭和47年度　重大ニュース

選・日本協会編集部

①斯界悲願のオリンピック出場果たす　（8月）

今年度の、というよりも日本ハンドボール史上トップに記されるべきできごとであった。

46年11月アジア予選を勝ち抜きオリンピック出場権を手にした斯界は〝本番〟を目指して強化路線を組みなおし備えた。6月11日の全国評議員会、同理事会で内外注目のうちに晴れの代表選手団〜近森克彦コーチ兼選手、木野実主将ら12人〜を決定。（このほかにJOC補助役員として竹野奉昭、日本協会派遣として村田弘の両氏）

8月26日ミュンヘン主競技場で開会式、8月31日から始まった競技で日本選手は力いっぱいの健闘を示した。

目標はベストエイト入りであったが、36年ぶりのチャンスに各国とも燃え、日本はこれまで1勝1分のユーゴ、1勝2敗1分のハンガリー、1勝のアメリカと組んだもののユーゴに14—20、ハンガリーに12—20と連敗、アメリカには20—16で勝ったものの予選リーグを突破できなかった。つづいて行われた9位決定トーナメントではノルウェーに17—19で敗れ10位内が空しくなり、結局アイスランドに19—18で勝って11位となった。

②初の全国中学生大会開く　（8月）

オリンピック出場と並ぶビッグエベントであった。文部次官通達にしぼられていた中学生の全国大会が〝解禁〟となり、各競技が次々に全国大会を開く中で、斯界は県単位、ブロック単位の普及が優先とじっくり時期を待っていたもの。

準備期間の不足などあって運営に不安はあったが、実施が伝えられると待ちかねていた中学球児が各地の予選にどっと参加、本誌の調べでは男子は26道府県、女子は22府県が予選会を行った。

8月18日から愛知県青少年公園球技場で行われた本大会は男子10女子9校が集まり炎天下に若さにあふれた熱戦を展開、記念すべき優勝校は男・東港（愛知）、女・福泉南（大阪）と決まった。

レベルも予想以上に高く、男子では全日本ジュニアに推せんの声がかかるほどの有望選手がみられすべてに大成功裡に第1回大会を終えた。

③全日本ジュニア(男)を編成　初の合宿

厚味のある頂点強化をめざす日本協会は懸案の全日本ジュニアを編成、11月、29名の人選を行った。

このメンバーは22才以下に限定それまでの年令にナショナルへ昇格できなかった選手は自動的に資格を失うというもので、ナショナルプレイヤーへの登竜門として期待は大きい。

29名の内訳は社会人6、学生17高校生6名で、このほか中学生3名もリストアップされたが氏名の公開は見送られた。初合宿は48年3月東京で開かれ、将来性に富んだ各選手が迫力にみちた攻守をみせてこの事業の成功を裏づけた。

④渡辺和美氏、IHF理事に決まる　（8月）

ミュンヘン・オリンピックを期にヨーロッパのスポーツから世界のハンドボールへと大飛躍を企った国際ハンドボール連盟(IHF)は組織の大改正を行い、大陸（地域）重点施策を探った。その結果アジア地域選出理事として日本代表の渡辺和美氏(日本協会副会長)が選出された。日本人が理事はもとよりIHF役員になったのは渡辺氏が初めて。

⑤大洋デパート、連続優勝記録などストップ　（12月）

43年8月の第20回全日本総合で優勝して以来、今秋の鹿児島国体まで出場した16の全国大会にすべて優勝という大洋デパート(熊本)の快記録は、全日本総合で東京重機（東京）のために終止符を打たれた。同時に45年8月以来の公式戦連勝記録も51でストップ。44年45年度は4冠王を飾るなど大洋デパートの無敵ぶりは永く球史に刻れよう

⑥GW・ダンケルセン来日、10回目の日独親善試合開く　（4月）

西ドイツの名門（71年度チャンピオン）GW・ダンケルセンが来日、3試合を行った。ムンク、ベンク、ドレッゲマイヤーらヨーロッパでも一流の名手を揃えた同チームはさすがに洗れんされた攻守で、日本側はオリンピックを目指す全日本(大阪)の1勝に留った。

昭和13年9月のヒットラー・ユーゲント来日を第1回に国内における日独対抗はちょうど10回目。

なお、ブッシュ選手は内外を通じ



国内のコートに登場した初の2m選手。

⑦「台湾との自主交流行わず」の態度決定　（48年1月）

日本オリンピック委（JOC）、日本体協の相次ぐ「中国承認」の姿勢に日本協会も1月の全国理事会、評議員会でJOC、体協の方針を「承認する」ことを申し合せ、台湾との自主交流を見合すと決めた。なお現時点では世界選手権、オリンピックなどのアジア予選における対戦拒否はしない。

台湾はIHF加盟国、中国は未加盟国だが、台湾とは交流経験がなく中国とは40、41年に2回親善試合を行っている（全日本は3敗）

⑧全国大会で初優勝相次ぐ

自衛隊…海上鹿屋（5月）
高校男…中大付（8月）
高校女…深谷女（8月）
実業団…大同製鋼（10月）
総合男…湧永薬品（12月）
総合女…東京重機（12月）

今年ほど全国大会で初優勝の多いシーズンはなかった。新鮮味に富んだ1年とも云える。しかも海上鹿屋は海上勢で初、深谷女高は埼玉代表として初、大同製鋼、東京重機は雌伏10年目でつかんだ栄冠、湧永薬品は大阪に初めてチャンピオンシップを持ち帰るという〝のし〟がついてのものだった。

⑨韓国から初の男子社会人チーム釜山旅客自動車来日　（11月）

各部門で積極的な交流をしている日韓両国球界で初めて男子社会人代表として今年の韓国体育大会成年男子1位の釜山旅客自動車が来日、日本の単独実業団と5試合日本勢が攻守に一日の長を見せて全勝した。これで韓国からまったく代表が送られて来ないのは未交流の高校女子だけとなった。

なお、今年度はこのほか慶熙大学（6月）、白花醸造（女、7月）が韓国から来日した。

⑩沖縄協会、日本協会の〝正式〟メンバーに。　（5月）

沖縄県の本土復帰で、これまで特別区扱いだった沖縄協会が他の46都道府県協会とすべての面で肩を並べ、48年度からは九州ブロックの一員に組みこまれることに決まった。同協会の拡充はめざましいものがあり、高校、教員、学生に好チームが輩出しているまた、8月には那覇で九州選手権が同協会事業の初のビッグエベントとして開かれた。

×　×　×
×　×　×

昭和47年度　常務理事会の動き

◇月例常務理事会（4月14日）
一、オリンピック第2次候補選手18名を承認
一、パリ大学(男)の招待とりやめ
一、47年度暫定予算を承認
一、IHFから国際公認審判員として安藤純光、佐野和夫、山用計の3氏を承認したとの連絡報告
一、全日本自衛隊選手権女子の部優勝者に日本協会長杯交付
一、全国中学生大会のブロック区分は日本協会の慣行を適用

◇月例常務理事会（5月13日）
一、全日本（オリンピック第2次候補）の欧州遠征中止報告
一、オリンピック代表チームに補助役員（コーチ）1名を確保の報告、補助役員は実質的な監督として現コーチのなかから選衡する。
一、オリンピック選手選考委員9氏を決定、
一、IHF総会に「地域選出理事」の提案を承認
一、台湾チームの来日希望(今夏)はことわることに決定

◇月例常務理事会（6月10日）
一、オリンピック補助役員に竹野奉昭氏を推せん
一、オリンピック代表12名が選考委員会から発表され承認
一、オリンピックチームコーチ兼選手に近森克彦、同主将に木野実両選手を推せん
一、オリンピックチームに村田弘オリンピック対策部長の同行を推せん
〜以上4項目は6月11日の全国評議員会・同理事会への原案〜
一、学連選出理事・中沢重夫氏の新任を承認

◇月例常務理事会（7月22日）
一、竹野補助役員の選手登録報告
一、年内に日韓審判会議を日本で開く準備を行う
一、日韓高校交流の派遣役員に嶋田新太郎常務理事を決定
一、オリンピック優勝国招待を含む48年度事業の検討
一、「クラブ」対策の検討
一、オリンピック時に自費渡欧するJOC調査団（田村会長ら4氏）、技術研究調査委員（神田常務理事ら10氏）を承認
一、宮崎慎六常務理事の辞表受理

◇月例常務理事会（9月26日）
一、ミュンヘンオリンピック報告
一、IHF総会報告
一、第1回全国中学生大会報告
一、第24回全日本総合選手権打合せ及び同開催基準要項の検討
一、48年度以降の日本協会機構の検討と沖縄県の九州ブロック編入の確認（＝日本協会規約変更）
一、今後の男女頂点強化について検討、これまでどおり男女併行した国際的進出を確認（荒川理事長）

◇月例常務理事会（10月14日）
一、日韓高校交流報告
一、47年度全日本高校優秀選手（候補）を承認
一、「クラブの定義」について検討
一、馬場元副会長の褒賞推せん
一、東北選出理事・森恭一氏の新任を承認
一、全国理事会議案の検討
一、オリンピック対策部の10月15日付解散を承認

◇月例常務理事会（11月18日）
一、アルジェリア国際大会(男子)への参加とりやめ
一、鹿児島国体一般男子登録問題の報告
一、48年度事業のうちNHK杯は6月大阪に内定、全日本総合は12月11〜16日東京に決定
一、48年度登録料のうち一般のランク制を検討
一、千葉国体のチーム分配は現行どおりに決定
一、国体参加チームのユニホームは県名を大書し、企業名などを表面に出さぬことを原則とする
一、全日本ジュニア29名を承認
一、女子世界選手権アジア予選の検討

◇月例常務理事会（12月16日）
一、昭和50年以降の国体について検討
一、日本スポーツ賞（読売新聞社制定）に「オリンピック代表」を推せん
一、女子ナショナルチーム監督に井薫氏を推せん
一、女子世界選手権アジア予選コーチ団（井監督、池田、鈴木、藤原コーチ）を承認。
一、同予選の「2試合日本開催」を準備することに決定
一、FA・ギョッピンゲンの来日受け入れ地を決定
一、ユーゴ・ナショナルの来日条件について協議
一、全国会議の日程決定

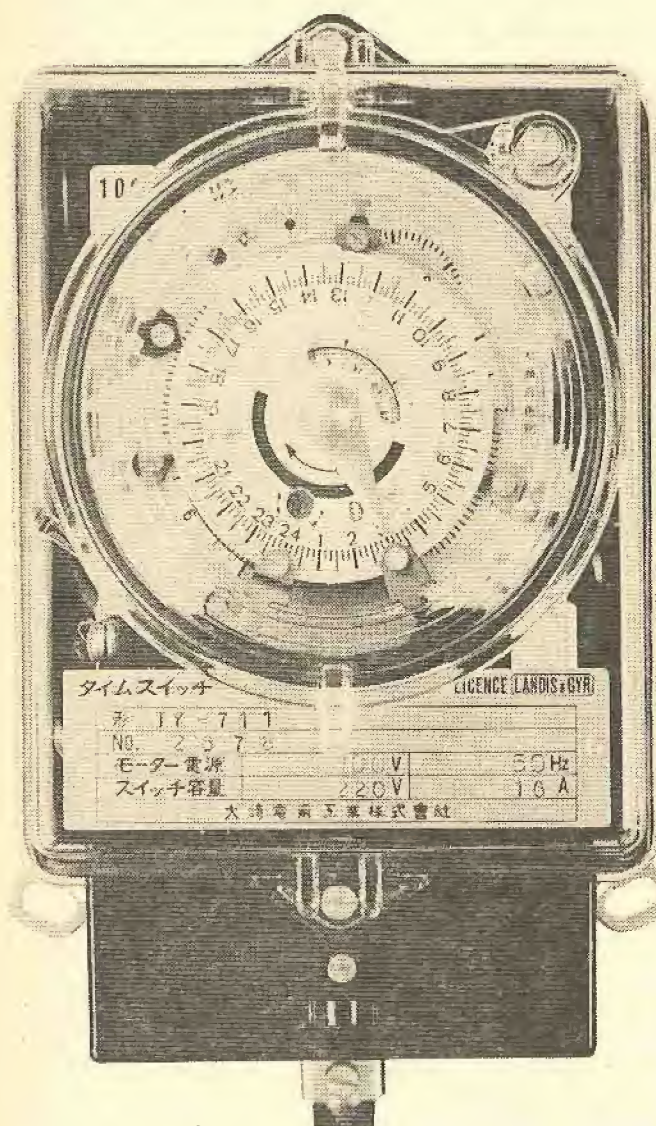
◇月例常務理事会〜47年度常務理事による最終会議〜（48年1月20日）
一、女子世界選手権予選の「2試合日本開催」を承認、4月12日東京、14日大阪。
一、同候補選手を承認
一、ユーゴ・ナショナル来日検討
一、新年度以降の自衛隊チーム登録についてあと2年特別措置の延長を決定
一、第2回全国中学生大会の開催地を愛知県下に内定
一、49年度まで国体の参加要綱はいっさい現行のままと決定
一、48年度登録料のうち一般はA・B・Cの3ランク制を採用
一、「中国に対する姿勢」は原則としてJOC、体協の態度を尊重
一、全国理事会の議案検討

Osaki

タイムスイッチ

TYシリーズ

24時間では足りないあなたに1日＝72時間



大崎タイムスイッチならそれが可能です
毎日、毎週、毎月、定時刻に自動的にスイッチを〈入・切〉するあらゆる設備機器や年間の日没・日出時刻に応じ、自動的に照明を〈入・切〉する場合に最適です。



大崎電氣工業株式會社

〒141 品川区東五反田2丁目2番7号 TEL.03 (443) 7171番

新しい流れへの提案 ③

地域を単位としたチーム作りを

藤本　強

今年度から新登録制度が発足した。この意味は、毎年々々卒業していくハンドボールのOB・OGを斯界に一人でも多くひきとめておきたいということである。

考えてみると、現在、日本ハンドボール界は高校チームを筆頭にして、千五百をこえるチームを有している。その大半は高校チームであり、そこからあとプレーをしているプレーヤーはごく少ない。

これらは毎年一万人前後のプレーヤーがそのままハンドボール界から離れていっていることになろう。

これらのプレーヤーをいかにハンドボールにつなぎとめ、次代の人材につなげていくかはハンドボール界の当面する大きな課題であろう。

では何故、これらの人々をつなぎとめられないのであろうか。それにはいくつかの理由があろう。

かなり環境にめぐまれたところでなければ、続けてプレーをしていくことは困難であろう。それをプレーヤーの情熱のみにたよっていたのではラチはあくまい。

もちろん、プレーヤーの情熱がなければ、このあとのことは成立しまいが。

グランドなどの練習場の問題、時間の問題など山積する問題は多いが、ある時期にハンドボールを続けていくんだという情熱をもったプレーヤーと、それに対応する日本協会を初めとしたハンドボール界の施策がありさえすれば、何とか解決していくことができるのではないだろうか。

何を今更とお叱りを受けるかもしれないが、やはりチームを作るということになれば、地域を中心にして、チームを構成することが基礎になろう。

現在の日本のチームの構成を見るとどうしても地域というよりは職場を同じにするものとか、学校時代の同一チームのOB・OGによって構成されているチームが多い。

これまでは、このような形をとっていたので、ハンドボール界を去る多くのプレーヤーが出るのを防ぐことはできなかった。

今回の新登録制度が生かされるかどうかは、この未組織の多くのハンドボールのプレーヤーをいかにしてハンドボールにつれもどすことが可能かどうかにかかってこよう。

一朝一夕には、この制度の施行のみによって、未組織のハンドボールプレーヤーが組織されるとは思えない。

今後の課題はいかにして、チームを作りやすい環境を整備していくかということになろう。その第一は地域を中心に、物理的な時間が少なくても集れるような地域にいる人々が集ってチームを作っていくことであろう。

そして、この人々が集って練習もしくは試合をする場所が確保できることが第二の点であろう。

第一の問題の解決のためには、その地域にどんなプレーヤーがいるかを知らなくてはならないであろう。

どのようにするかということになると、これはきわめて困難な問題であろう。

本誌でも、この問題を解決のために一つの手助けをしたいと思っている。それは本誌に県別にでもして、チームを作りたいと希望している人々の一覧と連絡先を掲載する欄を設置したいと思っているが、これは利用者が本誌の読者に限られるという難点もあるが、他に不特定多数の人々に呼びかける特別なアイデアもない。このような形とともに、もっとも力を入れていかなければならないのは、都道府県協会もしくはその傘下の協会で、この新登録制度の趣旨をクチコミその他で多くの元プレーヤーに徹底させてもらい、1チームでも、多くのチームを組織してもらうということであろう。

それとともに、ハンドボールの元プレーヤーの個々の情熱によって、それこそこういう手段を利用して積極的に地域を単位としたチームを組織してもらうようにお願

いしたいということである。

地域を単位としたチームがどんどんと誕生していけば、ハンドボール人口の拡大にもつながってこようし、次々と学窓を巣だつ人々もこのようなハンドボールの中に何の抵抗もなく組織されていくことになろう。全国の津々浦々の町村に必ずチームがあり、全国どこにいってもハンドボールのゴールが見られるような形に一日も早くなってほしいと思う。

第二の問題の解決はすこぶる困難である。学校の校庭その他には多くの問題があろう。

この問題の解決には、ハンドボール協会で基本的な案を練り、大どころを決めて、更に地方々々によって細かな施策を施していくことが必要になろう。

金がふんだんにあり、どこにでも次々とハンドボールコートをハンドボール協会で建設していければ良いかもしれないが、これは現実とは余りにかけはなれた考え方である。

外国のようなクラブハウスとコートをもったクラブチームが地域を単位として成立できるのは、まだまだ先の話になろう。しかし理想はもたねばならない。全国の各市町村を単位としたチームがクラブ選手権をかけて争う日々があることを信じていかなければ、今後の将来計画はありえないのではないだろうか。

当面これらの希望はかないそうもないので、既存の施設を何とかして利用する方向でものごとを考えていかなくてはならない。そして一歩でも理想に近い方向に進めていかなくてはならない。

ケースバイケースで理想の方向のチーム作りを進め、1チームでも多くの地域を単位としたクラブチームが成立することができれば正に新登録制度は成功したということになろう。

× × ×

下のような形で本誌に連絡欄を作りますのでぜひ御利用下さい。

またクチコミで多くの人々に本誌の存在をPRしてほしいものです。

新しい流れへの提案 ④

女性理事の登場を期待

日本協会の新役員が発表された。私は今回の改選で一つの期待をかけていたのだが、どうやら今回もそれは成らなかった。

私が注目していたのは「女性理事」の登場である。

日本ハンドボール界も年々発展、充実し、特に協会運営はいちだんとスマートになったと聞くが、もうそろそろ女性の本部役員が誕生してもよいと思う。

聞くところによると、地方にはだいぶ女性理事がでているというが、その波は当然日本協会にも及んでよい。

競技団体というと男っぽさを強く印象づけるが、どうしてどうして女性向きの仕事は多いハズである。

男性役員は純競技畑の出身者で埋められ、事務運営となると片手間な感じがする。この点女性なら巧くこなせる人材も多いのではないか。

女性理事の目が、いささかマンネリズムの協会施策に新しい灯をともらすことも可能だと思う。

一方、女性側～OG側～も大会や協会の手伝いというと、受けつけ、接待などに甘んじるばかりでなく、意欲的な姿勢を示す努力をしなければなるまい。

今期はムリだったようだが、次期は是非二～三人の女性理事を登用させるよう首脳陣の〝英断〟を望んでおこう。（女性登用の場合、一人というのはやりにくかろう。最低二人が必要である）

競技部門でも女子ナショナルなどにOGの活用を考えたらどうか。

指導面という分野に未知数の人しかも女性コーチを選ぶのは冒険だろうが、アシスタントにはむしろ男性コーチより利点があるのではないか。

このほか、女性のレフェリーも輩出してよいし、あらゆるジャンルに女性が進出する時期に来ていると思う。

いうまでもないことだが、女性（OG）の活躍の場を与えるのは、男性側の理解がなくてはできぬ。

日本のスポーツ界で男女両種目の競技団体は数多いが球技ではあまり女性役員の就任は聞かぬ。ハンドボール界がそのトップを切ってみたらと、甘ったれな提案をしてみる気になった。（了）

星野達郎（東京・42才）

連絡歓迎!! 次号より新設

『ハンドボールチームを作ろう』

ハンドボールチームを作ろうとしている皆さん連絡欄におよせ下さい。
連絡先（住所氏名・電話番号）を掲載し読者に案内をします。

新しい流れへの提案 ⑤

役員の職業化とプロコーチの実現を

鈴木厚志
（東京都杉並区在住・41才）

日本のハンドボール界もすべてに成長し、事業の巨大化、国際化は外側から眺めみている我々にとってもはっきりと読みとることができる。

昨年のオリンピック参加によってこのムードはいちだんと高まりさらに今後のオリンピック定着（と伝えられる）によって日本ハンドボール協会はますます多難な行動力を必要としよう。

その期を目前にして、日本ハンドボール界が、新しい流れとして何を求め、考えるかといえば、それは旧態依然の運営感覚を拭いたること以外にないと思う。

「ハンドボール」誌を読んでいても、新しい事業感覚、事業意欲を待望する声や意見は多く、従来のままの器（うつわ）であっては自らの事業が溢れ出し、収拾しきれなくなってしまうのではないかという不安を感ぜずにはいられない。

そこで、私はいささか奇想とうけとられるかと思うが、いくつかの私案を論じてみたい。

私が述べようとする根幹は「プロ化」という一語につきる。

もちろん、これはハンドボールをプロスポーツにせよ、というのではない。チーム、プレイヤーはあくまでアマチュアであって欲しいが、協会運営者やコーチは、もはやプロでなくては、さきゆき大きな斯界の発展は望めないのではないか。

これはハンドボール界に限ったことではないが、日本のアマチュアスポーツ界でおきるスキャンダルはいつも、その主人公（言葉を悪くすれば被告）が「職業としてではなく、趣味として、そのスポーツの先輩として役員をやっているので……」と語って終るケースが多い。

なるほど、このセチ辛い世相のなかで、アマチュアスポーツに時間と金をかけ得る人は、以前にも増して〝奉仕〟の精神が強い人なのだろうが、だからといってすべてドンブリ勘定式センスでコトを運んでよいというものではない。スポーツへの認識が高まれば高まるほど、競技団体の社会的責任は強まるわけで、この点を間違うととんでもないことになる。

ハンドボール界の場合、こうした目覚めがいつも他のスポーツより遅いのは残念だが、どうだろうここらでプロの役員、プロのコーチを作ってみては――。

つまり、協会運営の主軸はすべて有給の職員で執行するのだ。

詳しくは知らないが、現状の事務局はおそらく、庶務的な処理機関で、協会運営の主導権はOBと称する選手あがりの古手役員が握っているのではないか。

それらの人たちの熱意は買えるし、尊いと思うが、本職の合い間にモノを考え、モノを実行しているようでは、斯界に新しい流れなど望むべくもない。

少くとも企画部門や会計部門は職業化した役員を置いて対処すべきだと思う。

10年前とはいわず、5年前でさえ「日本ハンドボール協会に就職する」などと考えた人は居ないだろうが、今後はそれぐらい窓口を拡げて人材を迎えなければいけないと思う。

もちろん、それにかかる人件費や勤労条件などを考えると一朝にして実現できぬかとは思うが、考慮されてしかるべきだ。

この拙文が誘い水となって、そうした道を選ぶ若者が居たとしたら、日本協会は充分な条件を示して採用なさってはいかがか。

プロコーチも、もう出て来てよい。近年、これもハンドボールに限らぬが、学生界のレベルダウンがささやかれている。いろいろな理由があるし、社会環境も作用していよう。しかし、私が見聞する範囲では、先輩の熱が昔とは比べものにならぬほど低い。大学チームの監督やコーチは一体どれだけ現役の練習を指導にグランドへ出かけているか。一頃「日曜監督」という言葉が流行ったが、今や「月間監督」であり、時には「試合日監督」ではなかろうか。

これでは若い選手が伸びるハズはないし、高等戦術や好内容のゲームなど望めるハズはない。

そこで、もしプロコーチが居たとすれば、大学などはその人とシーズン契約すればよい。

もちろん、自分の学校のOBでなければコーチにしない、などと狭い量見がはびこるうちはダメだが、こうでもしなければ、よほどのことがない限り、大学の監督はますます名儀だけのものになってしまいはしないか。

プロコーチが確立すれば、コーチ間の競争も激しくなろうし、有能な人は充分生計も立てられるようになるのではないか。

契約する側も、される側もドライな感覚がこの際不可欠である。

春のシーズンをA校、夏から秋にかけてB校と転籍しても、とやかくいわない〝周囲〟がなければこのシステムは成長していくまい。

場合によっては、高校でもこの契約コーチ制を採ればよい。

伝え聞くところによると、高校スポーツも何かと騒がしくやっかいな問題が多くなっているようだ。

クラブ活動に部外からプロコーチを連れてくることが許されるかどうかは知らぬが、高校野球などでは時折、こうした話を聞くように思う。

ところで専業役員、プロコーチにしてもつまるところは、ハンドボールそのものの評価が高くなることが肝心である。

そのためには日本協会施策の拡充が必要だし、さらにそれを果すには役員の専門化――つまりプロ化――が要るといったようにこの問題は〝循環〟するわけなのだが、何かの機をみて、大英断を試みぬかぎり、日本ハンドボール界は、自からの器に、自からの水を収め切れぬ時期が来るのではないか。

最後にプレイヤーについても私見を述べたい。

私は、今や、純粋なアマチュアでは世界の上位へ進出できるとは考えていない。

ミュンヘンオリンピックで日本は11位であったが、これはむしろ好成績なのではないか。

上位各国は、プロとは云わないまでもブロークン・タイムペイメントなどを最大限に活用した〝生活保護〟を受けていると感じる。

日本選手団さえもメダリストになった種目や選手は、かなり日本のアマチュアとしては思い切った練習環境、競技環境に在ったものばかりといってよい。

おせじにも日本ではメジャースポーツとはいえぬハンドボールは好む、好まずを問わずアマチュアであったわけだが、それにしてはよくやったと思う。彼らは強化合宿やオリンピック参加の時、会社にどう〝処置〟されていたのだろうか、人ごとながら心配になる。

といって、アマチュアという枠がある以上、それを踏みはずすのには反対だ。彼らの辛い立ち場を考えた時、周囲が無責任に「上位入賞」を期待したりするのは、つとめてさけたいものである。

プレイヤーも、いたずらに他国や他の競技と「環境の比較」を口にしてはなるまい。

自分たちに与えられた範囲で精いっぱい戦うことで充分である。海外遠征経験が少いことを敗因にしたりするのはいけない。それによって学校を休み、職場からはなれなければならないのだし、プレイヤーがそこまで考えて発言してもおかしくない。

日本協会の運営や、技術指導はそれに見合う報酬を堂々と請求し支払うシステム、一方、プレイヤーはあくまでアマチュアの心を貫きとおす――日本ハンドボール界の新しい流れのこれは二大要素だと私は確信している。

（了）

原稿募集・新しい流れへの提案

日本ハンドボール界に新しい流れを、という声が内外から高くおこっています。

そこで本誌では広く読者の皆さんから、新鮮で独創的な提案をつのります。

次の要領でふるって御投稿下さい。なお、今回は日本協会役員の寄稿も受けつけます。

▽テーマ　日本ハンドボール界への建設的な提言

▽字数　二千字以上四千字以内

▽用紙　原稿用紙（タテ書き）

▽締切り　5月10日（＝本誌6月号に掲載予定）

▽原稿の末尾に住所・氏名（筆名も可）、年令、職業を明記のこと。

▽あて先　東京都渋谷区神南1の1の1　日本ハンドボール協会編集部（郵便番号一六〇）

▽提出された原稿は返却しません

日本ハンドボール協会編集部

編集部より

ハンドボールのA・B・Cは今回都合により休載致します。

☆★☆★☆★

海外トピックス

——杉山　茂——
（NHK運動部）

グルイア、西独へ

今月最大のニュースはルーマニアの至宝ジョルジェ・グルイア（ステアウア・ブカレスト、32才192cm、90K）が西ドイツの地方リーグ、TSV・ビルケナウにコーチ兼選手として迎えられたことだ。

フランスのスポーツ紙〝レ・キップ〟が伝えたもので、ヨーロッパのファンはこの話題で持ちきりだという。

それはそうだろう。グルイアといえば〝世界のゲッター〟の名にふさわしい現代最高のアタッカー。

彼がこれまでルーマニア・ナショナル（公式国際試合出場125）にどれほど貢献したかははかり知れない。グルイアの存在は「特定マンツウマン」という策戦が生み出されるキッカケになったのだし、彼の豪放なプレーみたさにどの国の体育館も満員になったのである。

ミュンヘンオリンピックでは体力の衰えをカバーするためルーマニアベンチは、彼を攻撃にしか使わず守勢になると交替選手を送り出した。相手の執ようなマークにもめげず6試合で37ゴールをあげ〝得点王〟になったことを御承知の読者も多いだろう。

そのグルイアが西ドイツ地方リーグの小クラブに移る。かつてルーマニアの主力であったモーゼルが西ドイツのTSV・ミルバアーショフェンにプレーイングコーチで招かれたのと全く同じケースだ。

TSV・ビルケナウの狙いはグルイアの力によって全国リーグ（ブンデス・リーガ）入りすることにある。ディナモ・ブカレスト（ルーマニア）からシュミットを呼んで西ドイツ制覇を遂げヨーロッパカップをも得たグンメルスバッハの例もあるが、西ドイツのファンがこの〝大物新人〟の登場にどんな反応を示すか興味深い。

MAI・モスクワ決勝へ

～男子ヨーロッパ杯～

ヨーロッパ23ケ国のチャンピオンチームが参加した第13回男子ヨーロッパ・カップトーナメントは3月15日準決勝が終了、昨年優勝のパルチザン・ブジエロバル（ユーゴ）とMAI・モスクワ（ソビエト）が勝ち残り、4月7日ドルトムント（西ドイツ）で決勝を競うことが決まった。

準決勝注目のMAI・モスクワ対ライプチヒSC（東ドイツ）はライプチヒが2m選手クラールらの活躍で先勝したが、モスクワは第2戦手固いディフェンスで逆転の勝利を決め、初めて決勝へ進んだ。

2連勝を狙うパルチザン・ブジエロバルも第1戦ヘルラス・ストックホルム（スウェーデン）の鋭い攻撃にあって7点差の敗戦、野望をくじかれたとみられたがホームコートに戻っての第2戦で8点差の勝利を握る離れ技を演じ辛くも勝ちあがった。

ストックフォルムの主戦メンバーはレナート、ダンの両エリクソン、キエル、フイツシェルストリョーム、ヨハンソン、GKストリョームら46年秋の来日組で、今大会はレナート・エリクソンがすばらしく当たっていたのだが、惜しい敗退だった。

ところで今シーズンの大会ほどホームゲームと遠征ゲームの勝敗が歴然としたこともなかった。

1回戦から準決勝までの22カードのうちホームゲームをキープしあい2試合の合計スコアで勝負を決めたのは11カードもある。ことに準々決勝以降は全カードがそれである。

これまでも注意深い読者のかたがたからいかに熱狂的なホームコートシステムとはいえ、いささか解せないという質問をいただいていたが、これには二つの理由が考えられる。

一つはなんらかの理由で主力選手が遠征に参加できない。一つはレフェリーのホームチーム偏重である。

前者は国境をまたいでの試合だけに勤務先の休暇がとれず欠場する場合が多い。また、国籍問題や政治的な理由で一部の選手がその国へ入れぬケースが時にはあるようだ。

第二の点は、潔べきな判定をみなれている日本のファンには理解しにくいだろうが、欧州通に云わせると「その傾向が強い」という。

ヨーロッパカップの場合、レフェリーは第三者国から呼ばれるが国際ハンドボール連盟筋（IHF）の公平を願う気持ちもこれでは報われていないことになる。

第1戦に遠征するチームは、負けるにしてもいかに失点を少くして差をつめておくかが第2戦へ微妙に影響するわけだ。

ナショナルチーム同士の対戦の時はあまり露骨なジャッジはないようだが、それにしてもこうした流行はアジア地域に忍び寄って欲しくないものである。

▽男子準々決勝第2戦・続報

ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）19（7―6、12―11）17 MAI・モスクワ（ソビエト）

第1戦との合計得点39―33でMAI・モスクワの勝ち、

SC・ライプチヒ（東ドイツ）17（10―7、7―4）11 ロコモティブ・ソフィア（ブルガリア）

第1戦との合計得点28―25でSC・ライプチヒの勝ち

パルテイザン・ブジエロバル（ユーゴ）13（7―8、6―4）12 シタルディア・シタルド（オランダ）

▽同準決勝第1戦

SC・ライプチヒ 14（5―5、9―6）11 MAI・モスクワ

ヘルラス・ストックホルム 20（12―6、8―7）13 パルチザン・ブジエロバル

▽同第2戦

MAI・モスクワ 17（10―6、7―3）9 SC・ライプチヒ

2試合の合計得点28―23でMAI・モスクワの勝ち、

パルチザン・ブジエロバル 23（10―7、13―6）13 ヘルラス・ストックホルム

2試合の合計得点36―33でブジエロバルの勝ち

女子も終盤へ

また第12回女子ヨーロッパカップトーナメントも終盤戦に進んでいる。決勝へ準進出を決めているのは

SC・ライプチヒ（東ドイツ）とニロック・アムステルダム（オランダ）FIFコペンハーゲン（デンマーク）、スパルタ・キエフ（ソ連）の四クラブだ。

ライプチヒは第6回（一九六六）以来久々の優勝を狙って張り切っており順当だが、ニロックの勝ちっぷりはみごと。

▽女子準々決勝第1戦

ライプチヒ・SC（東独） 16（8―5 8―3）8 ベスタル・オスロ（ノルウェー）

スパルタ・キエフ（ソ連） 13（8―5 5―7）12 ラドニキ・ベルグラード（ユーゴ）

テイミソアラ大学（ルーマニア） 13（10―5 3―5）10 FIF・コペンハーゲン（デンマーク）

プラスチカ・ニトラ（チェコ） 10（5―5 5―3）8 ニロック・アムステルダム（オランダ）

▽同第2戦

ベスタル・オスロ 12（6―6 6―4）10 ライプチヒ・SC

2試合の得点合計でライプチヒ

スパルタ・キエフ 11（6―6 5―0）6 ラドニキ・ベルグラード

FIF・コペンハーゲン 11（6―3 5―1）4 テイミソアラ大学

2試合の得点合計でコペンハーゲン

ニロック・アムステルダム 11（6―3 5―1）4 プラスチカ・ニトラ

2試合の得点合計でアムステルダム

ギョッピンゲン惜敗

西ドイツリーグ

今年の西ドイツ選手権（全国リーグ）の決勝は北地区1位のVfL・グンメルスバッハ（46年来日）と南地区1位のFA・ギョピンゲン（4月14日来日）との間で3月10日ドルトムントのウェストハーレン・ホールに一万二千五百の大観衆を集めて行われグンメルスバッハが終盤得点を重ねて快勝、2年ぶり3度目の優勝を飾った。

グンメルスバッハ 21（11―11 10―7）18 ギョッピンゲン

○……この試合ヨーロッパの大試合で恒例化している〝荒い試合〟の中でも大荒れの試合となったようだ。

選手同士の争いに更に観衆がそれに油を注いだ形になり、ついには警官をも大動員して、試合を続けるという形になってしまった。

○……地元紙の戦評では、レフェリーについて触れているが、もうレフェリーがどうのうこのという段階ではないようだ。

IHF技術委員のジーグフリード・ペライ氏が云っているように正に近来のもっともきたない試合という形容がピタリの試合であったようだ。

押す、つきとばす、なぐるありとあらゆる反則がとびかい、多勢の退場者と、多数の7MTがいきかった。

○……結局はグンメルスバッハがシュミットの右腕によって、勝利を握った。シュミットはこの試合13点をあげたが、そのうち8点は7MTによる得点であった。

○……試合は5―2、9―5、17―14と常にグンメルスバッハが先手をとっていたが、その後よくギョッピンゲンが追い、18―18とタイに55分にしたが、ギョッピンゲンの活躍もここまで、その後はグンメルスバッハが得点をあげ、このものすごい試合に終止符をうった。

観客の酒気を帯びた人々がより騒ぎを大きくしたようではあるが正にすごい試合であったようだ。

【藤本　強】

スペインが全勝優勝

～フランス国際大会～

第2回フランス国際トーナメントは2月27日から5日間ヨーロッパの中堅4ケ国とチュニジアが参加してリーグ戦で行われた。

各国ともこのクラスで勝ち抜くことが世界選手権への登場口になるとあってベストメンバーを送りこみ接戦となった。

その結果予想どおりスペイン（オリンピック15位）とフランスが勝ちつづけ、最終試合に優勝をかけたがスペインがモレラ、ロチエルらの活躍で押しまくり、フランスは三千のファンの声援に応えられなかった。遠来のチュニジア（オリンピック16位）がオーストリア、オランダを破り3位となったのは注目される。オーストリアからはFA・ギョッピンゲン（西ドイツ）の一員として4月来日するパッツァーが出場、活躍した。

フランス 15（6―4 9―9）13 オーストリア

スペイン 21（11―8 10―4）12 チュニジア

フランス 19（11―6 8―8）14 オランダ

チュニジア 20（10―7 10―6）13 オーストリア

スペイン 24（12―9 12―3）12 オーストリア

チュニジア 21（13―13 8―5）18 オランダ

フランス 16（6―5 10―8）13 チュニジア

スペイン 23（10―3 13―7）10 オランダ

オーストリア 17（6―9 11―3）12 オランダ

スペイン 19（11―5 8―4）9 フランス

【順位】①スペイン②フランス③チュニジア④オーストリア⑤オランダ

◇得点王・セバブティ（チュニジア）22点＝4試合

韓国協会の人事異動

信用すべき消息筋からの報告によると大韓民国協会はこのほど大幅な人事異動を行ない、専務理事（理事長）が朴応喆氏から徐立圭氏（ソウル大学出）に代った。

▽会長　朴昌源（唯信高速バス社長）▽副会長　渋淳泰、崔洛喆、金宗河▽専務理事　徐立圭▽総務担当　許亨茂▽競技担当　鄭鎮圭▽渉外担当　金仁洞

東ドイツの北欧遠征

地元で開く世界選手権で初優勝を目指す東ドイツがこのほど北欧に遠征、5勝1敗の成績だった。

東ドイツ 19―16 デンマーク

東ドイツ 18―15 デンマーク

東ドイツ 16―15 ノルウェー

東ドイツ 15―12 ノルウェー

スウェーデン 14―12 東ドイツ

東ドイツ 15―14 スウェーデン

第1回 近代オリンピック優勝メダル

発行／日本オリンピック委員会（J・O・C）
公認／国際オリンピックアカデミー
ギリシャオリンピック委員会







製作者
シュール・シャプラン



近代オリンピック優勝メダルの復刻について　鈴木良徳

いままでオリンピック大会の優勝メダルの復刻は、どの大会のものでも許可されませんでした。この第1回近代オリンピック大会（1896・アテネ）の優勝メダルの復刻については日本がオリンピックに対して長い間貢献してきたことと、オリンピアで毎年開かれている国際オリンピック委員会後援の国際オリンピック・アカデミーに第1回から毎回欠かさず参加している熱意が認められて、ギリシャオリンピック委員会と国際オリンピック・アカデミーが特に許可してくれたものです。

なお、第1回近代オリンピック大会では勝者に銀メダルと銅メダルしか授与されませんでしたが、復刻にあたっては現代的なかたちで、しかも日本の青少年のオリンピックへのあこがれをスポーツ普及の一助として、ジュニア用普及タイプをもあわせて発行することにいたしました。（J.O.C.オリンピック標章委員会委員長）

品　種	直　径	重　量	単　価
純プラチナ	23mm	22g	85,000円
純　金	23mm	20g	36,000円
純　銀	50mm	70g	7,000円
丹　銅	50mm		1,500円
亜鉛合金	50mm	普及タイプ	850円
三点セット	金・銀・銅		44,500円

●大蔵省造幣局純度検定極印入り　■製造／三井金属工芸

（限定発行）**予約受付中！**

★全国有名デパート、時計貴金属店、文房具店、書店、運動具店、J・O・C・または日本体育協会加盟団体等にて

■発売元／（株）フジセ リクルート サービス　本社 東京都港区赤坂5〜1〜5（菅野ビル）☎（03）584−7471（代）　支社 大阪市東区博労町2〜43（中博ビル）☎（06）261−9558〜9

スワロー兵庫ら仏軍艦と交流
とび入りの国際親善試合

兵庫協会は2月なかばから神戸に入港しているフランス海軍護衛艦アミダル・シャネル号の乗組員チームと親善交歓試合を行った。外国軍艦チームとの"飛び入り国際試合"は40年3月の独艦ドイチェランド号以来のことで今回の大会もなごやかなムードのうちに進められた。

第1戦は2月17日午後2時から滝川高校球技場で滝川クラブと行われた。審判＝森皓一（主審判）

滝川ク 26（14−8、12−11）19 アミダル・シャネル

○……アミダル・シャネル号は2月の初めから修理のため神戸港にドッグ入りしているフランスの護衛艦。ハンドボールのほかサッカー、バスケットボールなどのチームをもち、寄港先で親善試合を行うのを楽しみにしているという。

本格的なハンドボール経験者は主将のブランクリー、ドラクーオGKチボーの3人程度だが、平均身長177cm、同体重74Kとさすがにたくましい。

立ちあがりはともに相手の動きをさぐりあっていたが、時間が経つにつれ固さがほぐれ1点を争う接戦を展開した。後半になるとアミダルは疲れがのぞきはじめ滝川クは一気にリードを奪った。

コートサイドには多くの中学、高校生が観戦に集まり、アミダルの選手たちも「世界各地で親善試合をしているが今日ほど歓迎されたのは初めてだ。大勢の中学、高校生諸君の盛んな応援にも感激した」とたいへんな喜びよう、神戸で久々の"国際試合"は和やかなムードのうちに幕を閉じた。（幸田末之・兵庫協会常任理事）

◇

第2戦は3月3日午後2時30分から神戸製鋼所健保中央体育館がスワロー兵庫（全日本教職員選手権2位）と行われた。審判＝狩野幸介、白井勇。

スワロー兵庫 41（20−7、21−9）16 アミダル・シャネル

得	【兵庫】			【アミダル・C】		得
0	新井	GK	GK	エッツ	174	0
0	上野清	GK	GK	チボー	173	0
5	大原	FP	FP	ブランクリー	177	4
3	浜野	FP	FP	キャマレー	173	0
8	井上	FP	FP	キャネパロ	180	1
6	畑	FP	FP	キャサニュ	175	0
6	木野	FP	FP	ドラクーオ	180	5
3	藤崎	FP	FP	レオン	183	1
5	黒田	FP	FP	ロッテ	176	1
3	中村	FP	FP	ポッシェ	174	0
1	泉	FP	FP	ブラントン	185	2
1	上野赳	FP	FP	オーブレ	180	2
41	(1) 7MT			(1)		16

◇交代 アミダル・FPナボー、スワロー・GK松原＝ともに得0

◇アミダルの選手名横の数字は身長（cm）を示す。

○……アミダルはスワローが日本国内でも有数の強チームと聞いて慎重というより堅くなっておそるおそる攻めこむような試合ぶりだった。一方、スワローは第1戦（滝川ク）の内容から相手の力を知りつくし余裕をのぞかせてスタート、前半なかばで勝負のサキはみえた。

しかし、アミダルは30人ほどの同僚の声援もあって最後までファイトにあふれたプレーをみせ、特に外人特有のシュート・フェイントや長身を活かした当りの強いディフェンスはなかなかの力を示した。また、つねにフェアープレーを心がけるコートマナーにも学ぶべきものがあり、文字どおり「友好・親善」に終始した印象的な試合であった。今後もこのようなチャンスがあれば積極的に取り組んでいきたい。（幸田）

大同製鋼、好調なスタート

全日本実業団の最上位4チームによる定期戦・第2回ビッグフォアリーグは3月10、11日の両日名古屋の愛知県体育館で行われ、地元大同製鋼が攻守にまとまりをみせ、全日本チャンピオン湧永薬品（大阪）らをおさえ全勝、2年連続優勝した。なお、この大会には佐々木（オリンピック代表、中大−三景）ら今春卒業の新社会人が各チームから出場、注目をあびた。

大同製鋼（愛知）25（10−11、15−10）21 湧永薬品（大阪）

大崎電気（埼玉）15（8−9、7−6）15 三景（東京）引き分け

大同製鋼 20（11−6、9−8）14 三景

湧永薬品 17（6−7、11−7）14 大崎電気

三景 16（6−9、10−6）15 湧永薬品

大同製鋼 24（13−5、11−12）17 大崎電気

【順位】①大同製鋼3戦全勝②三景1勝1敗1分③湧永薬品1勝2敗④大崎電気2敗1分

○……新シーズンも全日本のタイトルを競うであろう4チームの対戦は、シーズンはずれとはいえ興味のあるものであった。

しかし、各チームともまだまだ新戦力を占うには未成熟で特に守りにまわると激しいプレーはほとんどみられず、攻撃面でもトップ

沖縄特別国体出場チーム決まる

日本協会は5月4日から沖縄県コザ市で行う沖縄特別国体高校女子トーナメントの出場チームを次のように発表した。組み合せは4月上旬決まる。

全福島（選手構成＝須賀川長沼4選手、郡山女3、好間、石川、緑が丘、福島市女各1）、小諸商（単独・長野）、全神奈川（横浜東5、明倫3、上溝2、市川崎1）、奈良選抜（添上5、郡山、桜井商各2、一条、生駒各1）、鳥取選抜（倉吉西、倉吉産業各4、米子南商3）、大分東（単独）、熊本女商（単独）、沖縄選抜（小禄4、興南、浦添、知念各2、那覇商1）

重機戦の陣容

日本協会は東京重機と対戦する全日本女子候補のメンバーを次のとおり決め発表した。いずれも47年度ナショナルメンバー。

▽GK 小原（大洋デパート）、和田（大崎電気）、大工原（日体大出）

▽FP 垂水、米、島田、蔵田（以上大洋デパート）、池田、谷沢（以上日本ビクター）、佐藤、岩井（以上大崎電気）、嶋田、木村（以上日体大出）、三毛（田村紡）鳥居（プラザー工業）

クラスにふさわしからぬボンヘッドが目立って多かった。

そのなかで地元・大同製鋼は1月愛知リーグ、2月東海室内と手ごろな実戦がつづいていたこともあり、まずまずのまとまりで3勝をマークした。

○……新布陣で注目されたのは三景。佐々木（中大）、加藤（早大）GK佐藤（法大）を加えていちだんと巧さを増し、大同も花輪（中大、全日本）が早くもチームにとけこみ巧みな動きをみせた。湧永大崎は即戦力の新人が少く、わずかに大崎がGKに岩下を多用しているのが目についた程度。

○……戦力的、技術的には未だしとあっても4者の間に散る対抗意識の火花はシーズン中と少しも変わらない。各チームのベンチは自慢の新鋭を温存するどころか惜し気もなく繰り出していたし、ベストメンバーをほとんど交替させず通すなど〃優勝〃に燃えていたようだ。そのため6試合のうち、前後半いずれも相手のスコアを上廻ったのは大同×三景戦の大同だけ。本格的シーズンに入ってからの激突を期待させるに充分だった。

○……以前は大学定期戦がファンやプレスの関心を誘ったものだが今やそれにかわりにこうした実業団の定期戦が文字どおり「ビッグフォア」らしくすべて盛大にとり行われるようになった。時の流れを感じずにはいられない。「実業団上位」は静かに、しかし、はっきりと球界のあらゆる面でその力を示しはじめたといえるだろう。（杉山）

東京重機、貫録の優勝

NBN杯

第2回名古屋テレビ（NBN）杯争奪全国女子実業団選抜トーナメントは3月16、17日の両日名古屋市体育館に地元・東海の田村紡（三重）、ブラザー工業（愛知）に、東京重機工業（東京）、日本ビクター（茨城）がゲストとして招かれて行われ、全日本チャンピオンの東京重機工業が貫録を示し初優勝を飾った。

▽1回戦（＝準決勝）

東京重機（東京）14（4－7、10－3）10 田村紡（三重）

日本ビクター（茨城）10（4－3、6－5）8 ブラザー工業（愛知）

▽3位決定戦

田村紡 11（3－3、8－5）8 ブラザー工業

得	【田村】		【ブ工】	得
0	久保	GK	佐藤	0
0	岡	GK	井戸田	0
0	沖	FP	鍋島	0
2	三毛	FP	藤浪	1
2	辻	FP	鳥居	3
2	金田姉	FP	杉本	0
1	横山	FP	長場	3
0	和久井	FP	森本	1
0	金田妹	FP	原川	0
0	松下	FP	岡府田	0
4	鈴木	FP	宮崎	0
0	落合	FP	鈴木	0
11	（2）	7MT	（1）	8

（審・稲葉、角）

▽決勝

東京重機 14（5－0、9－7）7 日本ビクター

得	【重機】		【日ビ】	得
0	上杉	GK	渡辺	0
0	三紙	GK	鈴木	0
1	牧野	FP	阿部	0
5	古佐原	FP	蓮見	0
1	市川	FP	滝	0
4	鈴木	FP	谷沢	0
1	生井	FP	額賀	3
0	市山	FP	高野	2
2	菊地	FP	川崎	0
0	折口	FP	加藤	2
0	岡部	FP	荻原	0
0	村上	FP	佐々木	0
14	（1）	7MT	（2）	7

（審・西川、河野）

○……商業放送がハンドボールに着目して招待トーナメントを行ったのはおそらく初めてのことだろう（昨年は全日本女子対同実業団選抜）。積極的な〃マスコミ進出〃を企る主催者の愛知実連も最近2年間の全日本チャンピオンチーム・東京重機（47年度）、日本ビクター（46年度）に地元東海の両雄をからませ球趣を盛りあげた。

○……新加入の選手起用を認めたのは男子の「ビッグフォア」〜前掲〜と同じ。

4チームのなかではやはり重機が安定しており、すっかりプレーに自信をつけているのが印象的だった。牧野、古佐原、市川の全日本トリオはさすがによい動きをみせ、なかでも古佐原は抜群。重機は守りにまわっても積極的なプレーをみせ、田村紡戦では前半の劣勢を後半、出足のよいカットから一気に速巧へ持ちこみ逆転、ビクター戦も古佐原の活躍で立ちあがりから優位となり、文句なしの優勝を遂げた。

○……他の三チームもビクターはまとまり、田村紡は立ち直り、ブラザーは一つの型がようやくできかけてきたなど特色をのぞかせたが、迫力、積極さという点で重機に及ばない。しかし、実力は紙一重であり、女王の座奪還を目指す大洋デパート（熊本）、有力新人を久々に加えたという大崎電気（埼玉）らで新シーズンは例年以上の活気に富んだ好内容を期待してよさそうだ。

○……注目の新人では加藤（浦谷高―日本ビクター）、鈴木（津女高―田村紡）らが第一線で充分に通用するプレーをみせたものの、キャリア豊かな既成戦力に割りこむのは容易ではなく、ベスト・ルーキー（最優秀新人）賞も、結局、社会人2年目を迎えようとする横山（田村紡、山陽OGクから移籍）に与えられた。

○……成長が目だったのは鈴木（重機）、額賀、高野（ともにビクター）、金田姉（田村紡）らで、GKはナショナルプレイヤーの（佐藤ブラザー工業）がだんぜん光った。（I）

名城大付属と清水西に栄冠

東海高校室内

初の東海高校室内選手権は2月25日四日市市体育館に東海4県の代表（いずれも単独）が参加してトーナメントで行われた。

男子は岐阜商をねじふせた名城大付属（愛知）と、四日市工（三重）の食い下りを退けた清水商（静岡）の決勝となり、名城大付属が鋭い攻撃で大勝した。

女子は接戦の末、清水西（静岡）と高蔵（愛知）が勝ち残り、延長にもつれこむ激闘から清水西が延長前半であげた点を守り切り、昨夏の全日本高校準優勝・高蔵を破る殊勲となった。

▽男子1回戦（＝準決勝）
名城大付（愛知）20（9－5、11－4）9 岐阜商
清水商（静岡）10（2－2、8－5）7 四日市工（三重）
▽同決勝
名城大付 24（12－2、12－6）8 清水商
▽女子1回戦（＝準決勝）
清水西（静岡）6（0－3、6－1）4 大垣農（岐阜）
高蔵（愛知）6（1－1、5－0）1 四日市（三重）
▽同決勝
清水西 5（3－1、1－3、…、1－0、0－0）4 高蔵

各地の記録

大同、田村紡ゆるがず
静岡教員、本田を降す

NHK杯（名古屋）を争う第12回東海室内選手権は2月25日四日市市体育館に東海県の予選勝者が集まり行われた。

男子は1回戦で大同製鋼（愛知）が新進・二和家具（岐阜）に順当勝ちしたのに対し、本田技研（三重）は荒い試合運びをつかれて静岡教員に敗れる波乱がおきた。決勝は大同が立上りから一気に静岡教員を攻めこんで大勝、3連勝を飾った。

女子は予想どおり田村紡（三重）とブラザー工業（愛知）の決勝となり、田村紡が後半逆転に成功、9連勝をとげ地元の声援に応えた。

▽男子1回戦（＝準決勝）
大同製鋼（愛知）31（14－6、17－5）11 二和家具（岐阜）
静岡教員 13（7－5、6－7）12 本田技研（三重）
▽同決勝
大同製鋼 18（9－1、9－5）6 静岡教員
▽女子1回戦（＝準決勝）
田村紡（三重）19（12－1、7－1）2 岐阜選抜
ブラザー工業（愛知）20（9－0、11－2）2 清水商ク（静岡）
▽同決勝
田村紡 10（4－5、6－2）7 ブラザー工業

男子で日南工優勝飾る

▼宮崎県高校新人大会（2月・日南高）
▽男子決勝トーナメント1回戦
日南工 20－8 日南
泉ヶ丘 18－5 日向工
▽同決勝
日南工 13（7－4、6－4）8 泉ヶ丘
▽女子決勝トーナメント1回戦
小林商 25－4 西都商
泉ヶ丘 7－6 都城西
▽同決勝
小林商 16（11－1、5－3）4 泉ヶ丘

深谷女商、新人戦でも強味

▼埼玉県高校新人大会（2月・教大附坂戸高）
▽男子準々決勝
浦和市立 6（分）6 教大附坂戸
抽せんで浦和市立高の勝ち
浦和工 13－9 浦和南
秩父農工 9－7 大宮
川口工 17－7 聖望
▽同準決勝
浦和市立 12－5 浦和工
川口工 17－6 秩父農工
▽同決勝
川口工 8（4－4、4－3）7 浦和市立
▽女子準々決勝
深谷女 8－4 熊谷商
聖望 11－6 浦和南
川口女 2－1 浦和西
浦和市立 10－2 嵐山女
▽同準決勝
深谷女 11－4 聖望
浦和市立 13－3 川口女
▽同決勝
深谷女 7（6－1、1－2）3 浦和市立

倉敷商OB、岡山教員降す

▼岡山県一般男子室内選手権（1月・玉野スポーツセンター）
▽準々決勝
岡山教員 11－10 児島柏会
天城OB 13－7 落合ク
倉商OB 15－5 二日会
岡山大 18－10 川崎製鉄
▽準決勝
岡山教員 13－11 天城OB
倉商OB 17－13 岡山大
▽決勝
倉商OB 20（9－8、11－6）14 岡山教員

第一工、抜群の攻撃力

▼熊本県高校選抜大会（2月・水前寺体育館）
▽準々決勝
第一工 35－7 御船
菊池農 棄権 工大付
水俣工 19－15 市立商
第二 17－13 鎮西
▽同準決勝
第一工 34－7 菊池農
水俣工 14－9 第二

▽同決勝
第一工 13（5—4 8—2）6 水俣工
（注）女子は後掲の沖縄特別国体予選記録熊本の項参照

三菱レ 日新製鋼に逆転勝ち

▼第2回広島県総合室内選手権（2月・広島県立体育館）
▽男子準々決勝
修道ク 27—17 日本鋼管福山
三菱レ大竹 18—5 呉工ク
全広島商大 16—14 呉同好会
日新製鋼呉 23—10 広島教職員
▽同準決勝
三菱レ大竹 22—5 修道ク
日新製鋼呉 44—13 全広島商大
▽同決勝
三菱レイヨン大竹 24（15—9 9—11）20 日新製鋼呉
▽女子1回戦（3試合）
広島一女商ク 20—2 呉商ク
広島一女商クB 22—4 呉豊栄ク
山陽女ク 16—3 進徳ク
▽同準決勝
山陽女OG 7—6 広島一女商ク
山陽女ク 9—4 広島一女商クB
▽同決勝
山陽女子OG 8（2—6 6—2）8 山陽女ク
引き分け、両者優勝。

自衛隊勢が上位へ

▼第4回千葉県一般・実業団男子選手権（2月・市原市臨海体育館）
▽準々決勝
佐原ク 13—7 丸善石油
海上第4航空群 31—17 海自館山
住友千葉化学 15—12 波多ク
海自第3術科校 32—5 嶺岡航空隊
▽準決勝
海自第3術科校 13—11 佐原ク
海上第4航空群 20—18 住友千葉化学
▽決勝
海自第3術科校 26（16—8 10—4）12 海上第4航空群

高校女子で明倫が初

▼神奈川県室内選手権（1月・横浜平沼記念体育館ほか）
▽一般男子準々決勝
三春台ク 19—10 慶応ユニコン
セントラル自動車 18—7 日進商会
日本発条 26—16 蒔田ク
神奈川教員団 27—19 川和ク
▽同準決勝
日本発条 21—14 神奈川教員団
三春台ク 11—8 セントラル自動車
▽同決勝
日本発条 16（9—8 7—3）11 三春台ク
日本発条は2連勝
▽同女子決勝
神奈川ク 13（5—1 8—2）3 市川崎OG
神奈川クは初優勝
▽高校男子準々決勝
湘南通信 13—9 慶応
一商 20—10 多摩
川和 18—10 磯子工
横浜商工 22—7 川崎
▽同準決勝
一商 10—5 湘南通信
横浜商工 10（分）10 川和
横浜商工の抽せん勝ち
▽同決勝
一商 13（4—7 9—4）11 横浜商工
一商は4連勝
▽同女子準々決勝
明倫 9—7 上溝
川崎 14—2 江南
北鎌倉 8—4 多摩
日野 7—3 東
▽同準決勝
明倫 7—4 川崎
北鎌倉 6—3 日野
▽同決勝
明倫 10（7—3 3—3）6 北鎌倉
明倫高は初優勝

富山は有磯 安定した力

▼第12回富山県室内選手権（2月・富山市体育館）
▽一般男子準決勝（＝1回戦）
氷見ク 棄権 富山想球会
氷見クB 24—11 富山教員
▽同決勝
氷見ク 13（6—3 7—7）10 氷見クB
▽高校男子準々決勝
小杉 17—8 富山工
富山商 13—6 富山
氷見 8—2 八尾
高岡商 14—12 二上工
▽同準決勝
小杉 16—10 富山商
高岡商 10—6 氷見
▽同決勝
小杉 13（6—5 7—0）5 高岡商
▽同女子1回戦（3試合）
小杉 9—4 清光
富山女 14—0 富山北
高岡女 13—1 高岡
▽同準決勝
有磯 8—2 小杉
高岡女 7—2 富山女
▽同決勝
有磯 10（5—1 5—2）3 高岡女

栃木、国学院を破る

▼栃木県高校女子新人大会（1月・国学院体与館）
▽1回戦（3試合）
栃木女 8—5 小山城南
佐野女 11—6 足利商
馬頭 14—6 足利女
▽準決勝
栃木女 10—1 佐野女
国学院栃木 27—3 馬頭
▽決勝
栃木女 5（5—1 0—2）3 国学院栃木
（注）男子の部は前号参照

トヨタ車体、大同に肉薄

▼第26回愛知実業団リーグ（2月・名古屋市体育館）＝男子のみ
▽1部
トヨタ車体 26—13 トヨタ自工
ブラザー工業 20—14 三友工業
新日鉄 19—9 三友工業
ブラザー工業 19—16 トヨタ自工
新日鉄 27—5 ブラザー工業
大同製鋼 23—9 ブラザー工業
新日鉄 20—10 トヨタ自工
大同製鋼 25—4 三友工業
トヨタ車体 22—15 ブラザー工業
大同製鋼 12—4 トヨタ自工
三友工業 18—11 トヨタ自工
トヨタ車体 23—15 三友工業
大同製鋼 16—12 新日鉄
トヨタ車体 20—12 新日鉄
大同製鋼 18—14 トヨタ車体
【順位】①大同製鋼5戦全勝②トヨタ車体4勝1敗③新日鉄名古屋3勝2敗④ブラザー工業⑤三友工業⑥トヨタ自工
▽2部1位決定戦
日本碍子 24—15 豊田工機
【2部順位】①日本碍子②豊田工機③パイロットインキ④三菱自動車⑤タヨシ産業⑥中部電力⑦アイシン精機⑧トヨタ学園

沖縄特別国体県予選

◇熊本1回戦
鹿本商工 10—6 尚絅

天　草 8—5 九州女学院
熊本市立 10—5 菊池農
▽同準決勝
熊本女商 25—3 鹿本商工
熊本市立 14—4 天草
▽同決勝
熊本女商 10（2—3、5—4、1……1、2—1）9 熊本市立

鹿町工追撃及ばず

▼長崎県高校新人大会（1月）
▽男子決勝
口加 12（5—2、7—9）11 鹿町工
▽女子決勝
島原農 10（3—1、7—1）2 佐世保商

「各地の記録」への寄稿を歓迎します。締切日は特に設けませんが大会終了後速やかにお送り下さい。用紙自由。ただし原稿を短かくする場合があります。（編集部）

福地氏が理事長に　関東学連

関東学連はこのほど48年度主要役員を次のように決め発表した。▽会長　西敏郎（慶大出）▽理事長　福地賢介（早大出）▽審判部長　斉藤和夫（茨城大出）▽委員長　岡田修（中大）▽1、2部、女子部委員長　美斉津薫（日体大）▽3～5部委員長　井出茂利（専修大）

大阪協会

主要役員　▽会長　野原成之亮　▽副会長　山田計、藤田信明▽理事長　神田清▽副理事長　村田弘▽総務局長　前田吉弘▽競技局長　山中善之祐▽審判担当　光島磯雄▽会計担当　村中明朗（財務）、山田稔（会計）

宮城県協会新役員

▽会長　松川金七（県医師会々長）▽理事長　森恭一（宮城二女高）▽学連理事長　斉藤節郎▽高体連委員長　勝山宏▽小中学部長　山路康男▽県協会事務局住所　仙台市連坊小路195・宮城二女高気付

青森協会理事長に斉藤氏

青森協会はこのほど理事長に斉藤浩氏を新任した。また事務局も青森県上北部野辺地町・県立野辺地高校、斉藤浩氏気付に変更された。

読者投書欄　明日への提言

懸念される日韓判定の差

昨秋までに開く予定だった（機関誌一〇一号記載）日韓審判会議について、その後何も開かない内に女子世界選手権の日韓予選をやる日が近づいた。幸いこれは中止になったが、以前から問題点の多かったこの問題について、審判部が73年度からルールが変るからという理由で延ばして来たようだが、そのようなことでは何日まで経っても統一出来ないのではないかと思われる。今回のアジア予選は日韓両国の審判員でそれぞれ一試合づつを担当することになっていたがヨーロッパのように第3国から審判員を呼んでいても、圧倒的に地元が有利になっているのだから、ルール解釈の違う両国の審判員が変れば、それ以上に変るのではないかと懸念される。

大会前の審判打合せで両国が互いの主張をゆずらなかったら試合すら行なえないことも考えられた。これまで再三説かれながら日韓審判会議を開かずにいた審判部が怠慢であったと遺憾の意を表明しただけで果して済むのだろうか。

今後のこともあるぜひとも早急な開催を望む。【愛知・T生】

「明日への提言欄」への投稿を歓迎します。字数は400字以内。日本ハンドボール界に対して建設的な御意見を!!なお日本協会役員の投稿は御遠慮下さい。

編集後記

1973年度の初の雑誌をお届けします。本年度は去年ほどではないにしても、色々のことがありそうです。

男女の世界選手権が開催され、ヨーロッパチームも巧くいけば、3チームが日本を訪れることになりそうです。

トップのほうはこのように、話題豊富な年になりそうです。曰く女子の全日本がどこまでやるか、曰く男子の全日本が予選を勝ち、ソ連、東ドイツといった従来の全日本がもっとも苦手とした相手に対しどこまでやれるか。

オリンピックの金メダルチームユーゴを相手に我国の全日本を始めとした各チームがどこまでやれいかに実りある招待にあるか等々と一年中話題には事欠かないことになりましょう。

さて、底辺・普及ということになると、トップほどハデではないにしても、今後永く話題になり続けるであろうものがやはり数多く並んでいます。

中学生の第二回大会、新登録制度、まだ検討中ではあるが国体の改革など今後の日本のハンドボール界の行方を大きく左右するであろうことがやはり並んでいます。

この中での話題はやはり、今年度発足した新登録制度でしょう。

これをいかに活用していくかは、今後の日本のハンドボール界を大きくゆり動かすことになりましょう。別項でも触れたとおり、編集部でも、大いにこの制度を活用してもらうように、チームを作るための連絡欄を新設することにしました。ぜひとも御利用下さい。地域を単位としたチームが輩出し、ハンドボールを楽しみ、地域に定着させていく。これが軌道にのれば、実に楽しいのではないでしょうか。

先号と今号、北と南の実に地道な活動をなさっている理事長に、登壇していただきました。

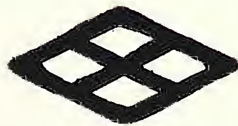
正にこれらの方々の努力には頭のさがる思いです。ないところから有に、しかも市民ぐるみの活動色々とかかえておられる問題はありましょうが、理想的な方向を指し示しているのではないでしょうか。

こういう地道な活動の中から、ハンドボール界の基礎ができ、またこういった多くの人々に支えられた中から、トップに入るであろうプレーヤーが生れてくる。

しかし、このためには多くの解決しなければならない難問が山積しています。

できるものから、ケースバイケースで克服していくよりしかたないでしょう。　（F）

合織糸・合織混紡糸



田村紡績株式会社

社長 田 村 正 衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593－65－2156（代表）
郵便番号 512

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一〇七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十八年三月二十五日印刷 昭和四十八年四月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一―一―一
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価 二百円（年間購読料 千八百円）